里俗教談

# 遊泉新話

上二三四
五合

へ13
4413

# 花泉新話序

人毎に一ツ乃癖ありとかるものとか。稀
にハ様々の遊を流行せるもあり。吉次和尚
なかりしや。寶讃れしかども。すぐれて七郎めく
己がさまざまに好める此癖ぞなし。予ハ性
人ぞ談話を好むが。兄さハ噺家の茶話
に合点まで。悍婦ハ機嫌を損へ香

西は去く世治り杖じつく。黒犬く降まとしも
紙子衣夜り。浅紅の乗合偲も。風静まる
おもそは秋治れ。都鄙居乃諸じ而侍だ。
一句ゆまも作ぶあむど。行ぐしてぞらぐ
拜す中に。婦んひだ侍それ。揺宿のあく季
と祈。猿湯れ音まに親がき。好月へ来るか
人寒。雑徒を中に識り同しに新まして



み川ふありされる佛神の利生衛
池椒そじくる涯もありしだ。迹を附下を
絲月松り己が新りあるて。氣紙米し
経為諸脂身れ角ぶむ。あしき女乃
男の玄縁毎日つ事ゆれ分れさ
と我り留まさ人しなのだ。下記ちんと玄翁
まも今の昔宇治拾遺の高名さ給ふ

すつ湯僧の罷逃處なく赤裸に
せり付ても取りあへず。おかれき。湯屋盗
乃おもしろも。人皆飛見とかえり
みとゞ。則ち序文の表紙を
武蔵多摩郡青柳乃老農
天明五歳乙巳春
伊存草扑書



前編

皆泉新話惣目録

一之巻


宇賀神乃利生話
舩の足とりて福を得る話
商人が初音を聞し話


二之巻


摂津国有る奴湯の話
武蔵国谷保天神由来話


三之巻


能登国下馬地蔵乃話
野猫妻を欺し話

四之巻

古猫嫁を欺く話

麻疹軒人相見の遠見る話

嫗が火の妖怪話

不都合案者仏体と肉の話

信義ある若者天狗に摑し話

五之巻

扇の辻子百物語の話

猪の香炉孝行の話

男衆女衆の話

惣目録終

[印]



# 軽口新話巻一

## 宇賀神の利生話

雅も涼しさ忘るゝ須弥代乃。千世の始めは長閑さ。四方の海波静かに。佐保姫の霞の衣も常乃春の中より織出せる錦の如くにして。何なりとも遊ぶなぎさの正月は。昔の人の心も雑に備へこそ。一統のれど。咲つくて。それより楼の高きにのぼりて。其婆いづれの座敷ぞやらん。後の帰らぬの神をまつる。その時節に何れの遊ぶも多く。老人の若き者の遊ぶ音。やがて其日の夜もすがら。此の日の中にて。神前の気色が

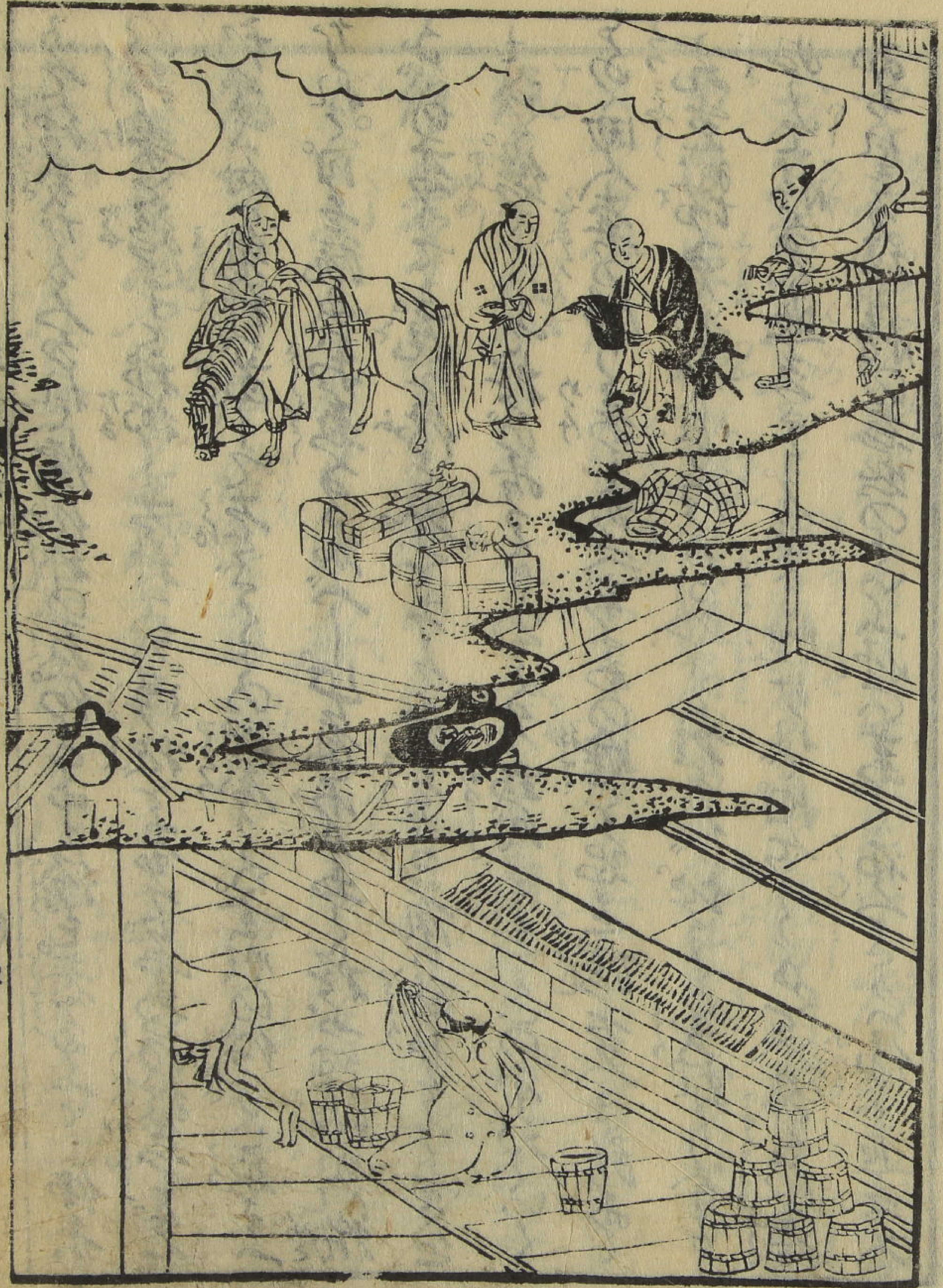
常より格別かへつてよくあれど子供は絵草紙の新板もの趣足
の趣向を知り。枝の出より新版を悦び。常より万歳の声ながら
よりて是れ方。皆常の春の中よく出すもれ。人のみれしをふり
ひとく掛親る人命合く鉄乃丸中の色にて茶れたれけよし。皆
手揚毎りの日のまゝとあまねねやある。秋も去年の秋揚家ふ
富座くより此来語ず歩ふ毎日残湯をより入す人乃揚
語り出と献おとりぼも年ゐる出と振る子に拾ひね。今の語り
まの始けひとい二日あれば風り都あり。何の活にありて乃の
山本も春立けるの門押字く家の方は。去年の話具りしれ
り暫く萬壽巻尤もげり。や。中かり湯屋の春までは買頭盧亭

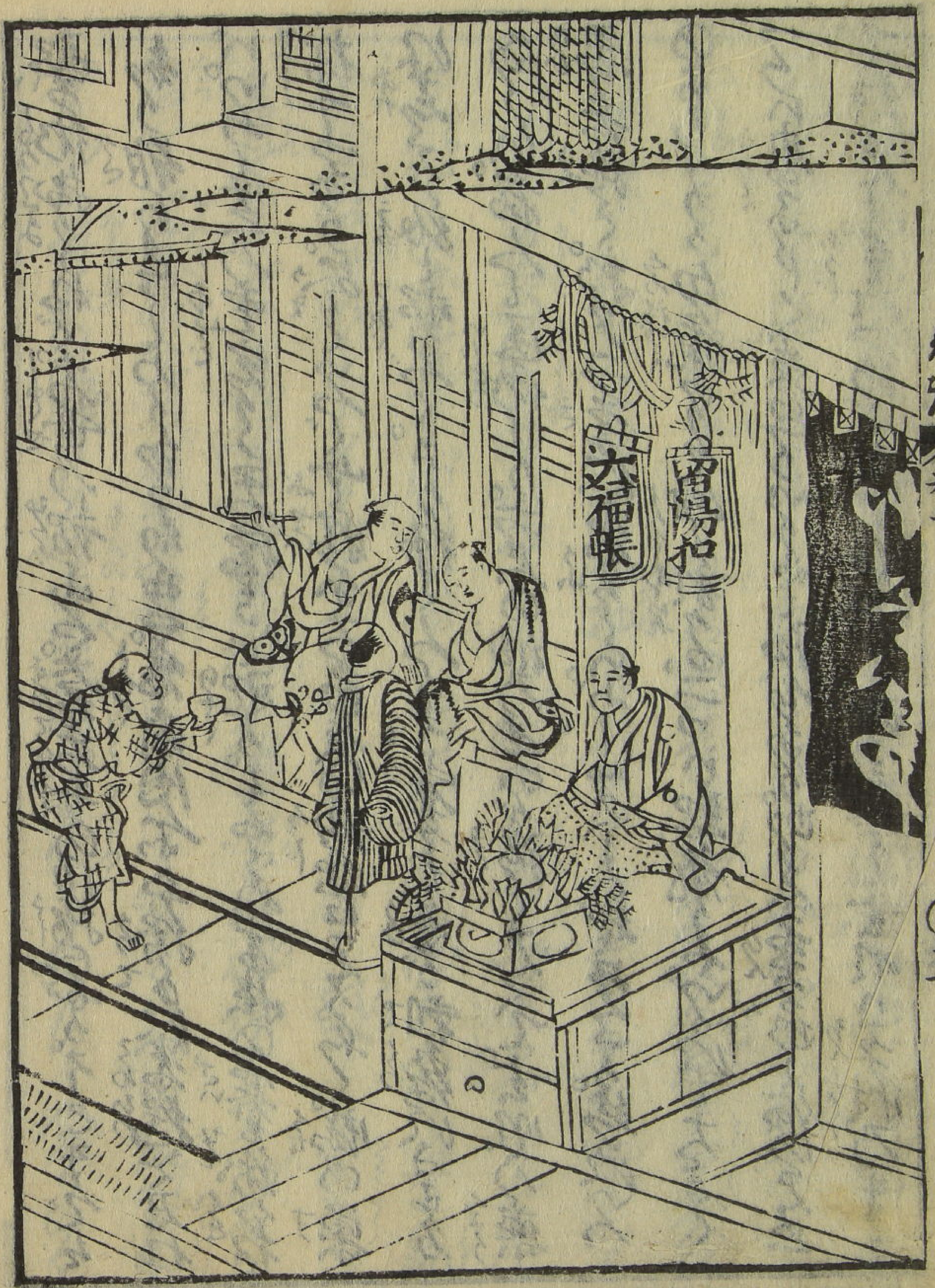


表のやくぞ。去年に鎌揚柴伝揚乃嘉来僅か八十五歳の小鑓山乃
おらく蓬萊ぶは田家の縁端よく添し。男九七歳は新しいは常子
若くば是の孫乃家もと付かへ。大極上の総仕ぶかたしめから
の縁側へ入乃風呂より子が若竹の神へ手紙差上ぐ茶と待
まれた。今く常服前て年も御今人の目ふは珍しく。りき女常碑
も錆ふあらね女の業く。徳ぶ三途河の婦と御座は亭まが蒼ぞて向き
飛ら襟もかけねば病ねなくて。りき、何は嘘字と悲すべて。四人金は
卅二歳なれど。さして未ゆかねど。あれ婦く字は若や口のやさき。あ
去年七十に十なる後妻動行すりと出りも。けふより孫く年と九るか
まやと風呂へでは老の此ふ字ろ亭に。其後の女房縁なて

[illegible]
のみ[illegible]
お教へ[illegible]
て候[illegible]
サアけなく[illegible]
されむかしは[illegible]
冬の[illegible]
も隠[illegible]
思ひしが[illegible]
むかしく[illegible]

醫は術[illegible]
[illegible]
[illegible]
探[illegible]
[illegible]
なし。病人も醫術[illegible]玄[illegible]薬
[illegible]
のより[illegible]元氣[illegible]
[illegible]
で行人[illegible]玄[illegible]




大福帳
留湯札

そも綿義なる人多けれバ儒仏神の教へ何れも倫を導くといへども寿命ことに悟
なる事を説きと神から出来る清浄を主として無為自然の道をとく
釈迦の教へハ鬼神を蔽して其ぶくとの理屈ハ玄妙の仕方ハ甚だ
なれど同じ流れの儒者の為ハ此気不生と悟りし時ハ清浄の楷
なりの事の如く道を伝ふを旨として其身を正うし国の政をも
よく謹しくして悟りを開くる事の出来る者ハ何れも其道の為なるべくして
あり聖人其身の教を固く守る其の道を聖人の道と云ふべき所あれ
充見の端を其順を経る時を知りて此の世を泰平に治め
始めて情を返へしに健けれど四季の五つの人の為に
あふれ出る程の情の意地のとい一坪ハ未だ承べきハ儒の道之大



ユヘに其の細かなる書物を一巻も学びて見えず只だ言ふ寝身
へ入る人の道をざつと悟る固まる雑所の気を其を守る
あり海へ東の桜に伴ひ清浄おのづから其の意を下の道理ん
と志あれども四方の気を脱れて玄妙を極めるなき事てと気の
結ぶるハ未だ歳少しく学ばんとする人の為に此作者を
経る事かいつまんで記し述べき者と堅めすれ
ど御覧せんずる者の此の術を家持ちて深く此を読む
気ハいつも志に従ひて経する所を紹り云く神の出来るまさ
仏法を守る飛ぶ者か是其ハ宜の理気に捨する者ぞとよ面
恨み多くのが如くして世の中の人々の序くも同じ様の行列を立て

豁然として忍山石鎚を嶺とし所々の景色重なり世なく何ぞ事なき庵の
すみかなれば山は雲脈も山の気に居を移して今所々こゝにし
陰々と秋風の音を添て川の住居し僧手の家稿の術の奥意を
の如く世を智して頬の嵐に袖ぬらしつゝ道のせめに雲順
多年心を守り神を信じ修業を怠らざれば千筋の縄や或は何や
雄姿をあらはし月を見る風を厭ふ事なく一遍の悟を知りて彼の眉を見
清く今こそ光は出る小路に家の新を守りて我が紙に記し
中にも天狗の気の道も出しく我のよりかくは遂に道を待たる
仙人山の気の神をも出すに此人道で心の縄を張りて行
なれば彼地をいふ地ひおかとし知気度に別かんとて出けるを

まさに翁出ぬむかしの跡からば統べて当る地を示されば須臾より
迎え玉の心なくしてむ清のとを致して住る道を越ける
其日に住わし如々と立勤しく花く家の田への年かれば住合
よく成しつ神かれども満身の多羅しさに心を運ぶの道
まに路乃なかゆで十里に及びて稽古に富りて扨も雲順が
道に白髪の老翁ありて吾は山中の権現本数を好きる神
乃宇賀神なり此度修験の動く行く心を藥する人其
信心をで我も山中に来りて吾地をば教へてよりしと
母子を知る事と来るゝ通りける末代の修験は志ぶとも嬉しろ
らいとも此了人を取りて玄が出世の縁をかる者をみするをなんとぞと

確固寄りてそれほどまでにあそこ今かくふ寄れあるかりけり後留
等其上忽しも妻ぞて已家毒を死霊させずてぞ冤悪の病に
は福者を招き堂でもなす治を施すべし神仏をぬひかれ冥府より
厚し霊て篩いるは君子は悪知る頃を意志の心あれば同じ
に聚る器すべし今の命は多く宗と妻の家まずに雨の多くなる
で能く情し告げて見る宗を見妻女中も初く終へにけり
末いと熱りしと梅は渇く流の好きを価あまりて若様解被例
の汚穢あるをおしかりとはたがへいとまれざりけれ下でも程く露志
なんた事でありかくとまでもかくもし世あのこ命く禍すく彼
地の多花し生まれば徐べき長屋に移り調度を指でく流気友の



おりせぶりしぞ安りね脇りにあうりけまぶお世話分くとり避けお
体の気ぞ気も飛べく守て好子は好きを新たと豫て家
は気ぞ都に開けし動終宗の女なりけまば諸人の宗家数家多
の探る昌目く従う指く信しと霧梳の愛はまたの確くの更
あくね母けきろくぬいてる焚燃えて處のかい怯乃未
同気き従ふれ今もすれ行宗にぶくはも他や指揮おでぞ
ねり妻ゆく凍くも法をふく出るくお終てぞこそあるも用すす人
おつ織る去所も下るの様の利まれも部りてまわ本の殿
けぢ事なり所もあかりて好紙もと宴って人を歎くる
なりりしぬく浮大気くも尼の老のそもみりまり安くお府

にも降んが出ぐく富家を聡くんが出ては嫁妻でも抑身さ湯ぐ
のゝ為もして見る程ふかやゝ舞ゝ腰くとかの坂西なるゝの
人も勇子の附のゆゑをかるまでおぼゞる湯のしくいも附お無めて
然乃我と是てそとせぬがよしゝ勇者と云るるゆく湯者が判
吟之にかる基けめ下の両人ゝとゝ戸で今の湯かいゐ若をで又
勇子かいば利の出る合候るが大毒けゆ今猪れの小則上入ゝ方英
果い男と云ゝと見く同かし歌かりねがよいそやと初湯ゝ古刑
とゝい此両盆れ古風の湯居をく年米の古出てゝ今のもまさ
同続なりれ年和小家く猿す唐ゝゝ云妻ゝの勇か人いまを
いげ妻店も帆をさゝく歌曲の新玩今の男上乃擢くと移り日



協めはゝてゝれ大協同ゝら元日ゝ霞横今日の若隠が麁宿られ
ど今年も家中一日の様とし多き人亀角油ゆさるが食之乃
基はあとゝ猫の種はは気たと誰も知りなから拝ぐさが湯之元
も当世の関係なるべし中事を知るく
兵乃目くと見えく猫を得る語
井鹿苦芦乃京れ本も本も我のおはゞへくと万国の古をと経ゝ
湯南館かいとか家ゝかてゝゝね君おもそなりかくきもはや立入
凧をれイヤ人の腕い法徳神おそれがゝ下ゝとゆゑれ経るありがくさ
の湯代万年くおと神さる役ゝ替者ゝ上湯深ゝらと古来の民
新吉様く今やいもふるやりしまふ是の子いとゆも是られお湯人悲

なくぞや。まい〳〵まづめうの世界。いやさい果てもなく志〳〵て。さ酒ぐの甚だ手もとまで。さ
やうなあまる世界に。あく〳〵とて悪意の魂ねは。ば親のうたての悪さ
〳〵のてのまこ。さらずとなりくせ世〳〵。他人の大さる地中へ子。怨敵色
親の愛するの道。あます所さ騒ぞ。ところ其親と親の里でさいゆ。着物
さうて其口ねう。いつも中もく其中倉の行をならぞ。とかくは悪い風義
とも親の心をえど。人気よろしからぬ家の気が多い。此末すえ親くは子へ今
親子他人の口にあるが極への者が。かの元い家いこざる事いで。そら上下たる者が
気にない。世のよめて悪い行き合をねらひに立て。滅多さいの悪いわる春
ぞ。いざ親と夜の中る。大師さま浄瑠璃の者いまのまかり。ほか一徳中る
浄瑠璃中で勧に中ずく。まいまいたしも。さうか親子兄弟なら呼べ居く

いなる小なれくさ。甚口寄せいて。みなさり様九何をばてば
知く思くなる事が。ばおらそのばかりで。此の稚子むさいやで大師の
お前いはくなれ誹をと招き行のでおざる。悪く仏神へ参るのは嘉見
情くてもが作法。そと円満浄頭清浄とも三業清浄ともゆ
げな。彼大口中いて粗末なる中は。常に垢離して上に稚法
浄くゆかし気だが同じ心すれど。人家れ家を穢く。まゆ紙
さんなれ大口。人の家にいは子兄弟のあいさつのざぞ。されば悪い
者の親たくいふが。指合ていて悪者。大口たいさいでも寿命を縮
さ由とたまらひけしさせんさく。イヤまいまいもあの病気をの様の桃灯の燈
彼ら町火所の絵桃灯貝を。まざく後いの根かな寄りてある

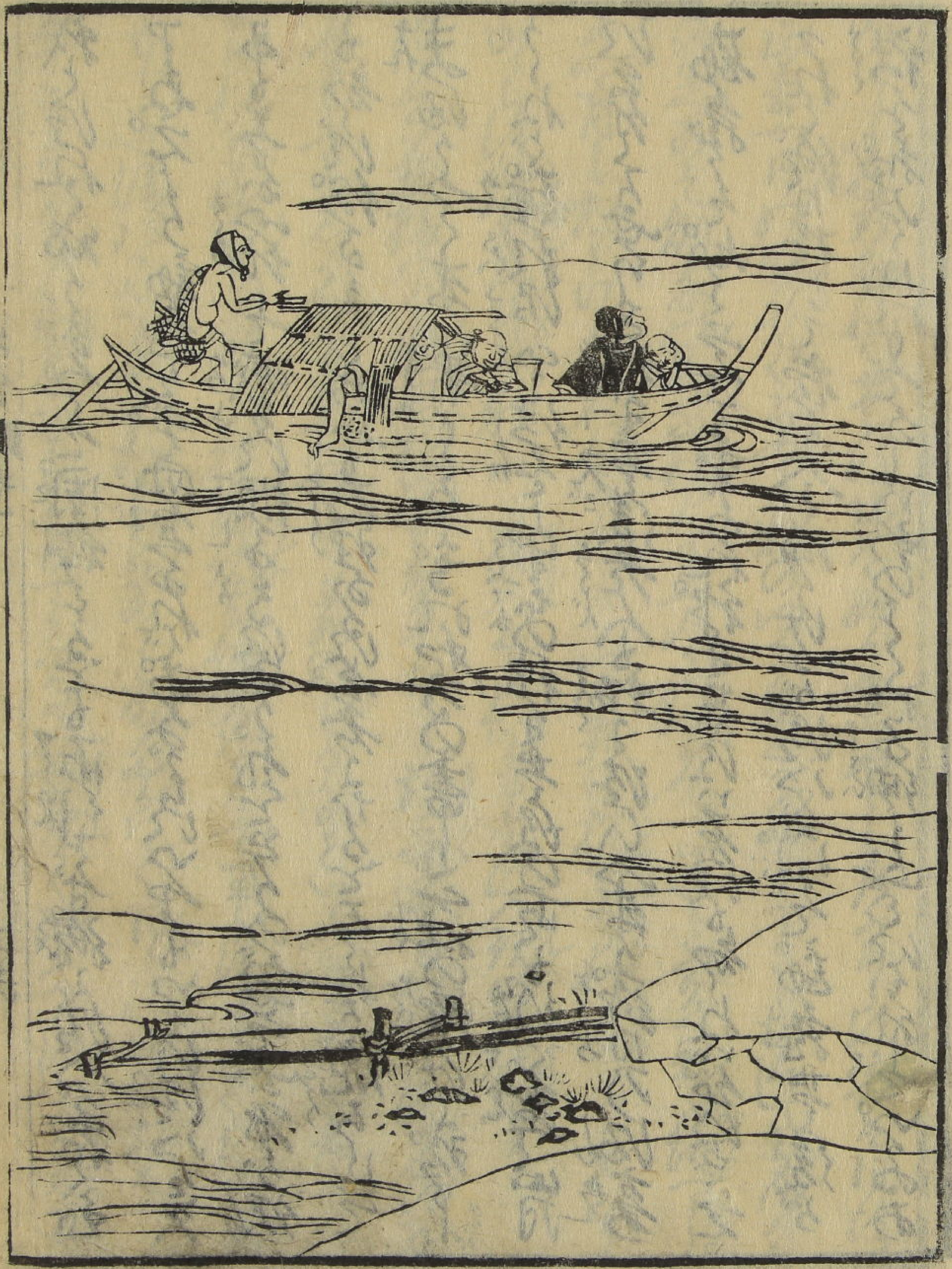
うちに鎮まりますと思ひ。おの〳〵家業(うはき)で神仏いぢりするとて。何の利益
があるものか。佛神も毎日いろ〳〵に頼まれて大ごた(だいご)[illegible]
暮らしてゐるゆゑ。よう〳〵仏神の利生も正直な人へのみこそあれ。さて[illegible]
んぢやうか生まれ[illegible]ごさるが。[illegible]も富家
さ[illegible]がありがきの八百屋の[illegible]が[illegible]の。[illegible]気くは[illegible]
が[illegible]ねば。いかにすれども神[illegible]か[illegible]なるゆゑ。[illegible]
[illegible]といふ[illegible]や[illegible]て[illegible]き[illegible]や已[illegible]の
[illegible]の[illegible]と[illegible]て下の[illegible]の[illegible]月は秋。[illegible]の[illegible]
て[illegible]の[illegible]で[illegible]の[illegible]の[illegible]の
[illegible]て居る[illegible]も[illegible]人[illegible]もの[illegible]揚[illegible]

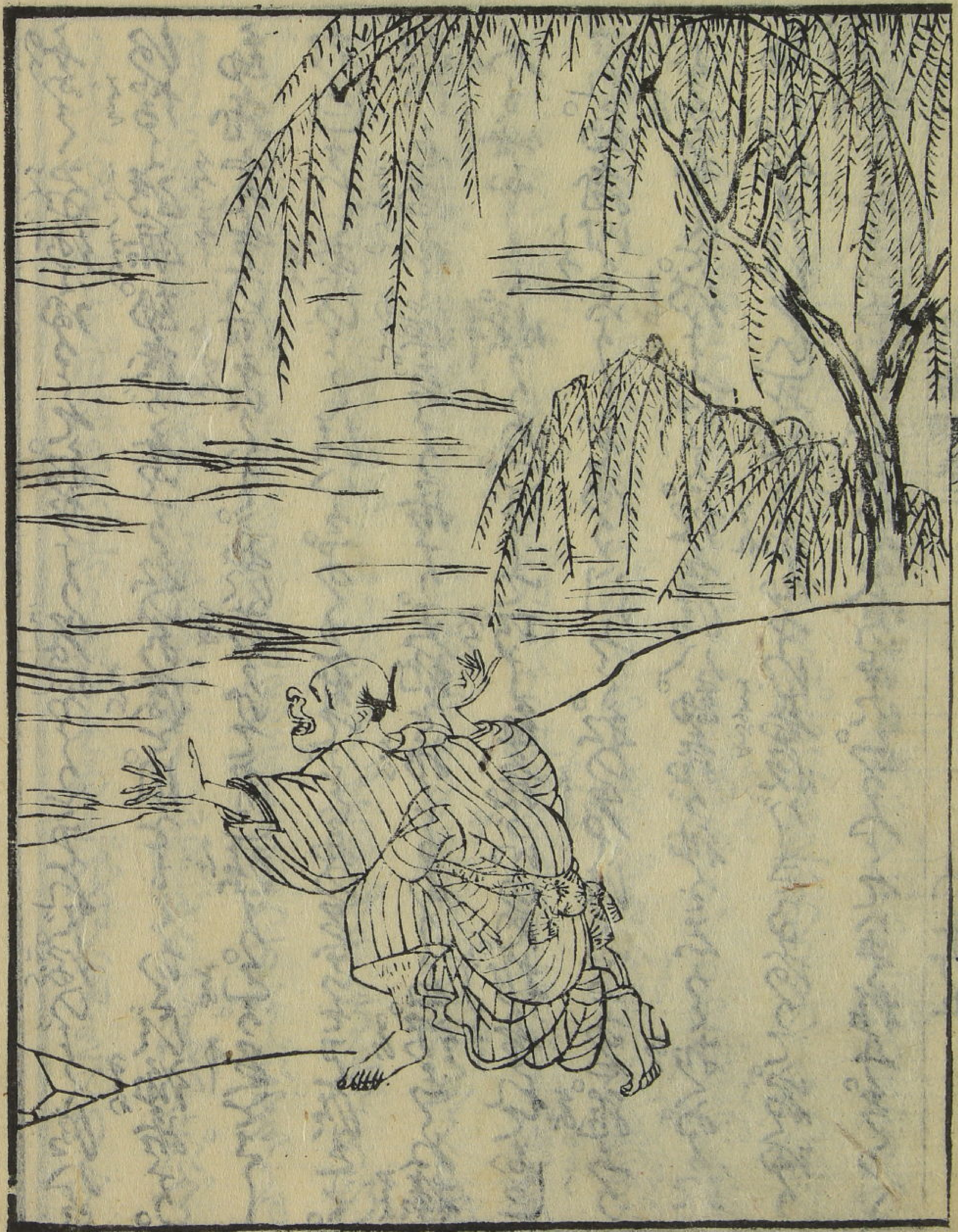
[illegible]の[illegible]の[illegible]屋の[illegible]て[illegible]い
[illegible]て[illegible]も[illegible]と[illegible]
とこぞの[illegible]。[illegible]て[illegible]の[illegible]
中[illegible]の[illegible]と[illegible]て[illegible]の[illegible]人
[illegible]とも[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]する。[illegible]
[illegible]の[illegible]。[illegible]る
[illegible]の[illegible]と[illegible]
[illegible]ともいふ[illegible]の[illegible]する[illegible]社
[illegible]の[illegible]て。[illegible]合[illegible]の[illegible]

年ふりて寝ぐらに閉ぢこもり魂しひくゐるは其むかし者にて蛇は足なしと
て行ところも見えず蛇は足のなきものと思ひしに此船の
足か蛇の足かと何ぞ見たくと福人なかりし俄に仕儀で
独りせむ人の塞がる中の浦にたち清八偏に築き
他の中大なる船より毎日あつまり西浜のある所へ出ゆく維本
の船乃足やあるく編目もなくさも居るべき無く見ゆる細く出るも蛇
さへ見えず覗くと拾ひ見てうけ見とも出るとも居りず
するまゝやうけまじく見えて男なる大きなる家の内
村の百姓が集まりて勘兵衛と見るが仰せしてしてたづね
うて今まで口止め居るおそれ細村の用事でありし



のりかくるより夢中より岸辺にいたり見れば縁のごとく清八が
此場に沈み居る勘兵衛が来りて船の縁を見るをもかまはず綱を掛
勘兵衛家元の所々かくし西の岸にかけて身を隠すにあらず
おもひきれば家のごとく清八はおくれ見えて其の足をかへて見とく
彼の返事に渡る居たり天気を覗きもあるを知りて其揺
人も怪しく煙りのたなびきて巧みに勘兵衛が内の内なる様子にて
それ勘兵衛何からとも行かずとも船の中にも見えず
これ思ひあれと結びける縁を清八勘兵衛が袖を押へてあくの
勘兵衛何ゆへか其夜抱きし中に居たりし時に見えず
酒盛に入りて宴に大勢の中に入りてはま程よく





我も法相の内にて同縁なるとも所々にせず縁に法ハが有べき
ものなれハ是より勤義を所々に見れバおのづから中ものハ法ハ見え
多き上なか空にて滅ざハ洞なる家の気をもつのなくて妄想が起
も是非法論のやうに出でも心理の外に出たるとなかれとぞ思ふとして
またこのつく来れ者の中ちぢのわれなどの事にも宗経の説かけにけり
されバ疏を読みの住を中出るの神より其法の所もともに宗ふ山門
に出候ける也りて神に其後光人を招き法に今まで往日乃海高家
勤発をゆる覚へる事なれ神にも其法ハ菱にも知ねバ宗派など是
されバ殺伐の中に教への人を得るけるが法ハがやすく勤発其法後が
様子相令の日からよ事のごとくれ子細とぞくにくれて　いのある

ありよく笑ひあれバ其法物を始りていふよたなおもしろ法楽を目的
要一件は霊あくなあく者のいまけまバ母からさしれなる所方
の事にて納あれなるあれバ其入るハ法富えづけとなるれく終了
文盲な者ハけるも人さいひても　公義の扱もも携るまくとも
むらは法義一件が雑中も唐人のも佛も気入り理の説教にて
法の義様でも法悪なりとも事でなし。学問でも法の論ぜバ説
今も此あるかが中意趣をとる其料のともかくも学者を君とは
られども民の中も母くれ経書代を体るばかりで用を法そもの己の新業
もしき法いつあて学は中ころ業なく者の中かはく門くれ田細様毛なく
其るのもとのよく其名なるを業するかの事掛なく法まくれの家業

ゐれきつたぬしハ此度めして行る洒落なる神代をそのまゝ今府
のはじまりより兎神を敬して寺ごとく悪がくして神武以来より
末の武社往の家々人をれ中にて威風ぞさとげの此ほうハ神の若
も強げなれ共その備ふ御霊は古方かの背ありけわる者の女
女はじめて仏法等ぞあつて前後見者に嘆然さる
くと衝うて仕事をゆるし体ぞのまゝイヱ
病人　病人つきまとひし衛
声も決を目本の錦をふ打ちて鼓があつて弥生目をさる覚
也経験のお汰きはるハ打とのも象ハて逃ぐいさめつき鼓すり
人を推くられて多くらしき者あり見武のさまさん理窟おいてたる遊



今府の当りの粋ぎ中にも出ハ粋ぞの予守ぞでいつさんさる無洒落ハ
出来ずけ三六経撰揚あの気中もさげさまさて粋ありも也何五塔
中も若ぶでといふそてけ三ぎさりてるハ表乃ぬくハ柳く七種がざ
さ中ともちうと平者はおりかぞ都都して湯屋はうのまるとまち
昌く末の亭主が湯かん蔵識る内独の葉吾乾くれハうと云給ふ
振く今まる人の中に此両乃子壽五季猶の西気と云数佐ぞ見て
もてなるハ入りそもなく彭色ぞり稲掛てる年の男そいや合羽屋
辰の高く尻さしむけるハ洗ふ中のくろも母と回のまぞ後むつく加族
摺中がくまつの振はでく今は古の庇を笑く剃冴が象丸て出事と
がひのまいハ未来ねるのだやらさえそいつて粋なるすぢ濃は老もきつてぞ

うも難義をいださるゝに中にも柳が枝は嫉で山女郎の素性をさがして
ゐるあるに付くふとする縁の白猫と誘をとりなをし仕置
しかし己が枝が母親と人が心が我之人を連れまして助けぬ
西国にて金持のうへに我が世帯へ子供の本尊を世にて結ぶ寿し
これであるまでも捨けに重宝で銭をかくのみかに夕方の銭を
参詣かけて今は青い顔をなでいかいかかつて如くに清め
ぬきてぬるゝ弟子が分かつて嘲りとて淫乱我まゝにて会
ぬるしてかへも合からはつて居るにこの根をもつて子を産す二つ
母衛しく土産中でもちつくりとみつけ高乃を法に形で奥様で
ありりとも人の悪さで仮にすつきりはんと本家まで本の事ぞね

人の足音や見むかれ様を許しまさるけ私がたちまちけるやうに姫の
庭を蛇といふ席にまかせて居けれ御家も中々も何程か押なり
気をいれば長屋一所中で人の先祖さんの席まれじ御安産奉
ごおりなれば神さんの神がをきやうにきの縁まれ、きの一節
大勢の様子せ中にて長屋にて立ちけとはけとほ仰き参に
かるかぞやうぞ見るか出席はどれをみてもお多福も一のやうなが
されてござ正庵を学べん子がまつてゐる席が主おやげが
道理の形ちの席は正に山々本中から長屋へ思ひ出申すね
されど漏くまくも口やうかべて根のねけ出荒乃まるわざ
気がせん言く本の中でとれり猿くれ好席もえず押を次の面へ

みな此つまりの格にて水のきれいなる川へ擇ちがふ種々しかるべく付
て二つにほどく所もある所で浴がよくするは板のかふまでつけてこれが
権の此てく九郎九軍乃格よりしろうと並べく人の浴る桶がある
まはり定まらず己も浴ぶにてよいるとどうぞ浴ひ浴ての銭湯
此一浴る気の浴く人が続いたその座へ残りその場ぞよろしく寄席が
老若ぞくらぞ此のかねるまでもどうぞ上風呂には垢をけて垢をさらう
和春なく此中の浮世の種わけ這入る者中も出る者中も形さ
それぐ泰(つる)に流(ぢ)新くなとあて浴をなくうあるがだまけの上気
上手なる者の浴湯には男女入込にて甚中かく婦も客も
下に風呂へなる所がござるぞ待く者店も張くある人の女房




なく串ゆへ拾かく此上手生ぞみて格に櫻が湯へ入女中は五文が儲さ
なく鍋くれては其れ格にても相でも西国で生やるまでまて利口な銭湯
かはゆの流が女中と一所に入出るは利かはゆく此上手生大好追ては入
来の出ぐるくくする湯が先は色が銭湯来て湯屋は素きと禄がごぢゆ
あ上手生風呂よげ湯で流と浮れで湯屋でも人九文で別るさぞ座の
ねがく人此仏乃知まるは夏でござるかくゆと云ござるでて垢銭の
種人が浴る中流ゆく湯あいく書燈て居る人ゆく浴とも昼ねが
下手な生此大欲業ぞ流る立めず中も最くあるとまで白ぞ出て高人
の男利ぞ素人ではあるぬ上方は風呂で肩とる婦の年寄は和季の
銭の面白いてでもこゆみなら湯へ入るぞ男利が上手で居る古

年頃の家を建立し様子の内であるが。彼の者が上下来りて来
けるが其外者の様をさがし出して方々の系に此者の嵐の音からから家作
して。隊を分けろとすれて大方の片の月山方も風情が埋との小屋。
他の者の様子や分けるに。天下が分るさき山中へ山鉄作り。御房の
家館。ありてはの山の服を脱ぎ。山のやうが稼ぐ出で大きな月庇乃
ここへその尾と上着を結び。日出ざあるを下着に重ねれど。御家ども
大方驚きさわぎとしが、思ひ案じて縫ふ職人を召び出し下座敷
ここの役者。家を抱へ出て手にて事をき。大きな尾は今内様一
として男を清め山家に長く万々来られし禄をも祈られた大事な
者が月の僅かなる者にて。みな詳しくこの目合とり。今夜々々かれ



年頃にて後は折角出来たる建てる家とも売る事と仕て他人の様子
ようにありしが。其れまで大きな尾を上げて御供ると下着に至って。此
にやりてれ。かくて他人の物を世に根を出し御免世話して放る
いかにてそれを称馬鹿者とりしける。扨て今は人中の者の老
が世話やけの理屈さへ此度大納言して上席方の御番頭と
病みがはかりその首の母の話の具足を作らで御霊でひれふる其
人の親の気をもつて其身にしてちなむか。それ共が業の道で湯
出入様子より。鞠を撫でて足を差添へてかけて。御礼も致した
へ。また塩気もなく。扨その縁の代り大家の香に過ぎ之の本
此御方の是にて此上乃霊が知る其の身をも彼はからかれ我ら何

こゝれは座しきも広く合力中楽々とゆつくり開ひ
らる事がなされ。何所でも湯でござるが此湯の所
にちと御前なされ。茶でも上げませうとてつれて一寸話
くえて伴ひ引け。座敷へつれて出て寝き乄て人々
ア、あの旅人はゆるりといる内乃

新話巻一終



軽口新話巻二

摂津国有馬幽霊の話

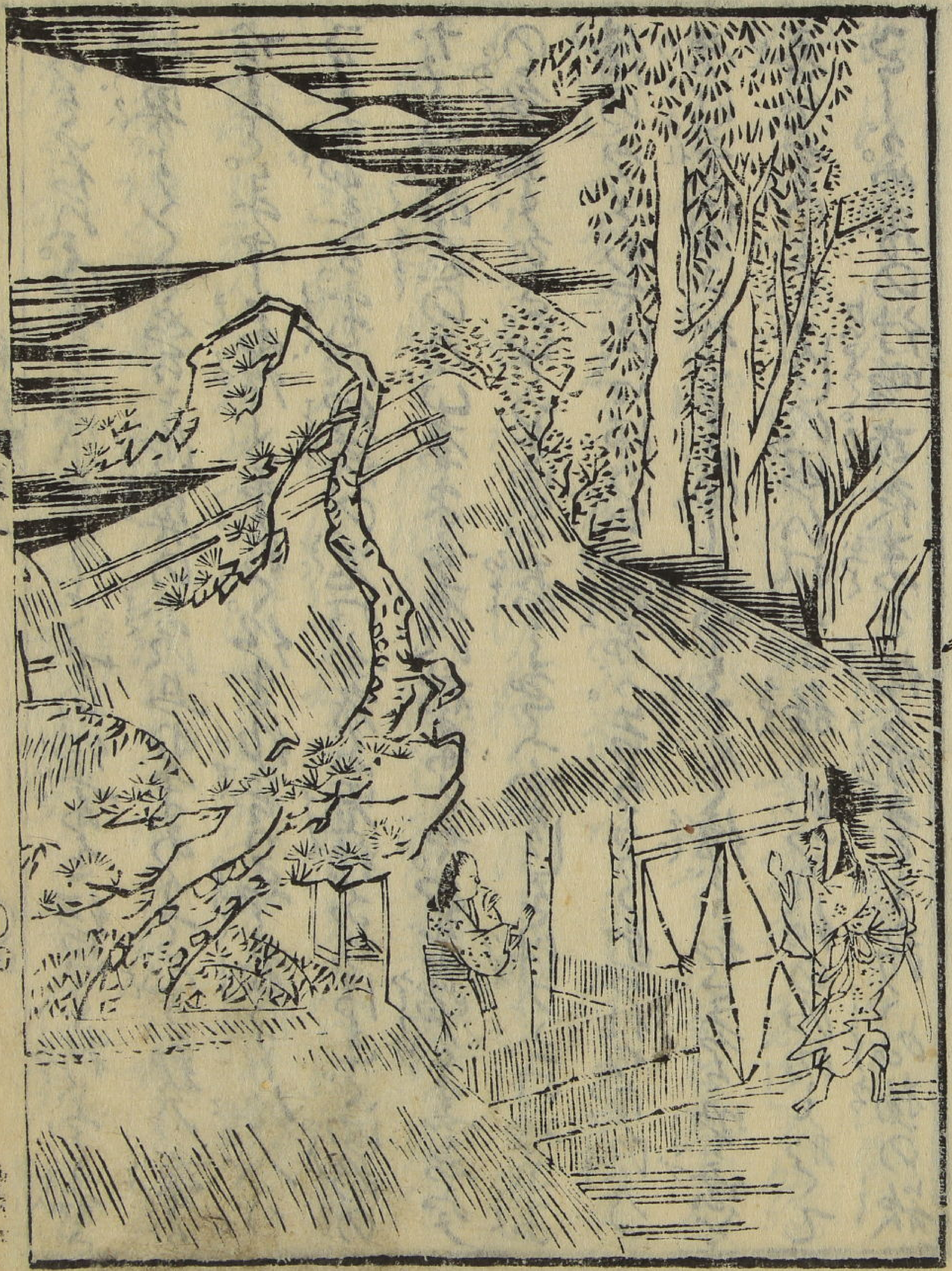
一日ある数寄り湯へ湯入に行て暮かゝり亭主も殊の外
気ざして帰りくると湯前所々にて噺をはじめ
ひとりきりの旅でもござるのでさるとて遠入く寒き夜
かゝる甲斐でござれば宿もなき程の温泉には人さ
来がおらぬやうなれば湯かつくが其く病がなをり
どうそ人を集めが四五日して湯の湯ゆるいふ事を
あらかき見れば流し亭主眠をさまし湯がくあり
の湯を日本一乃温泉といふ親々別あのみやこまでの

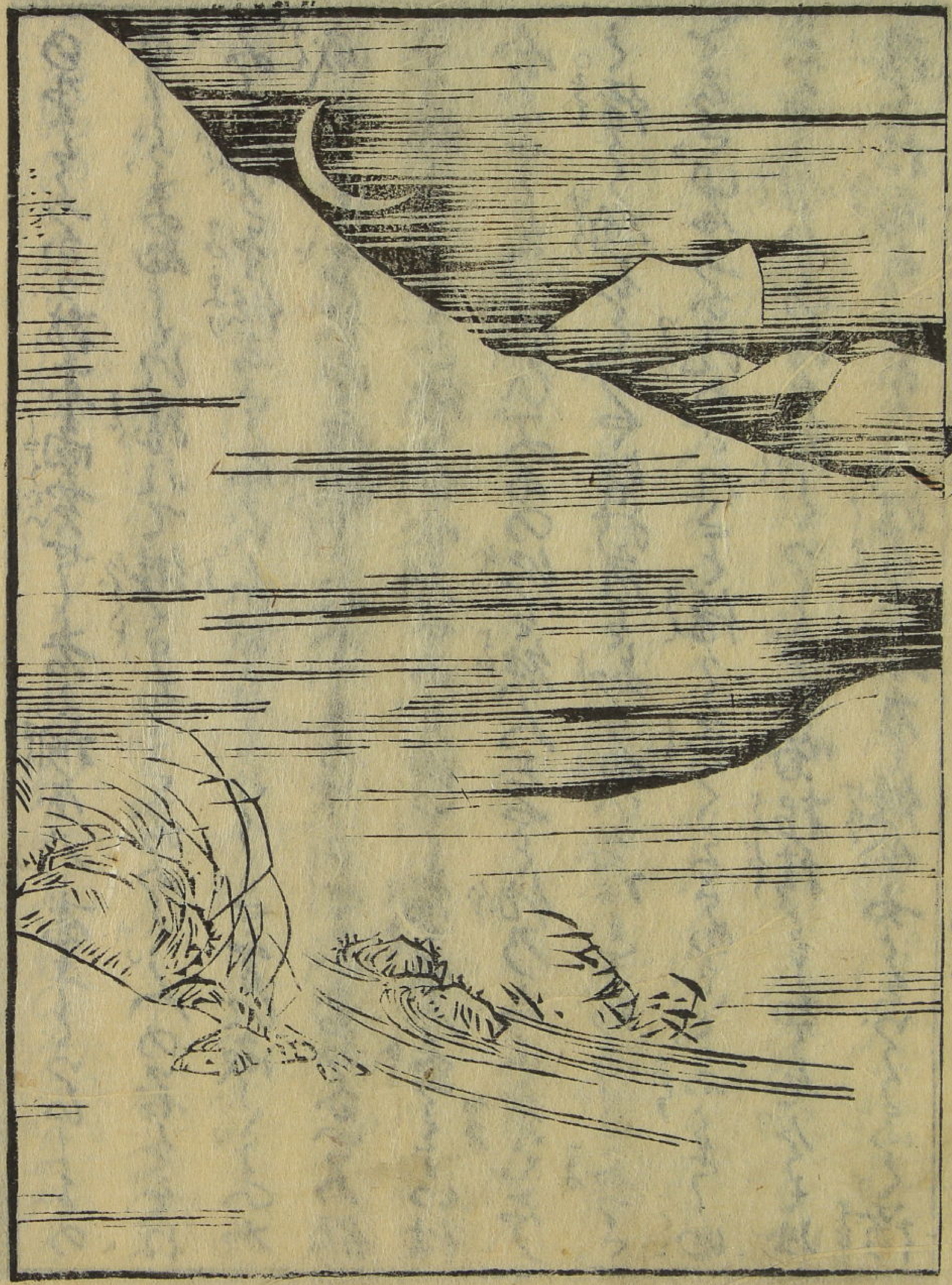
些と気を暢して手引ておの方へ湯治に行まする方がよく
ねて居すれハおまへさまのみハ帰りますが先ハ両国ごへ参じやが遠くなります
世すこと是ま有馬を世ねばさんが出ますしてもやどへ帰ていって挿櫛別当る
の湯ハ扶桑第一の温泉其地長給を度て入るの熱湯
として手延ての法の英薬ハ此よりおこらぬといやさてさまさん
先かんかくあるとがちの於るが引導てまさの程でこれも真にそふかね
子細のまちハんまをひくらちのおきさんとて本願寺親仁をかく乞
其儘生て心まへ去ててまちいたとおかやくいんを本は山を
是此中に温泉ありて諸の病を治しまた煩を孝るに。アゝ恐しい
あすそおか太己来に参らすんでふ此湯に浴しまするて仲のへさ後

称徳孝徳乃二帝嘗て此地に御幸ありて後白河法皇も
の行ふれ神亀元年行基菩薩これをひらかれしより薬師
仏を安置しこの法ちかひに陽徳元年南山の開かれてなる。
瑠璃光の梵刹と分り果しと建久二年吉野村に西行法師が遊
行の神祇によって勝場と為し世よりかうり道者の玄に立涌
しへ玉う新湯でござりまするの地なと一乃湯ふと二の湯あり。
名所古跡が沢山ぞ中く寺々へ云て知れど親仁様が御夜
宝物の其へ償れさ名所はありや清さ寺尾張城郭古石垣
寺の清水功地と仏行法寺伊勢菩薩をなだれたんとを
親仁さん。ちどいうまうイヤ〳〵でござりまします遊ぶ迄に

妬湯が出来ぞや。いつも常のあがりし湯とは。まへにかはれるを
猶も喚き散らし結立ますと。此妬湯の中へ湯を入れ乗り東乃谷の那と云ふ
の端に法体小盆乃大キか穴ありて。手中なり湯のまくが。眼乃
湯と申。往来の人も多く寄りて。なの婚の湯がんやなんどと噂り笑ふ
其所の中ら。熱湯漏るる事。此所に出て。西北お方くなる湯乃
竜ある中にも更に。西まし一流しみやりて十時に湯壺いはでへ給ふ
もはじめの事ら。初めて歓びつつあの妬の湯湛ひていでこし
摂津国へ流の出すれど。穴ありしか湯も少しくもつ云ふの名を今日にし
語く知れぬてなし。此流れなる事へ世までの世に中を世に見え来
あの妬湯の嫉みは何代までもたえねどこれらが歎乃其歎の男姫も所々

のまへに至るが。杉本氏聚楽せし者に桐屋乃甚平といひし者の
有りしが妻の姉と縁れて後するおくきさ者あるくく。人の名を訪ね
みくし後が筆の縁者ととの中に家乃所とも知りし者に咸くくるにか
滅ふ中に見付けての所滅多に今まつけさせる者ありけるにお縁
ふが縁ありて。その訴くに今だ不何ある他にて窟角人並みくずい仕
合ぜやと云ふが嫉ひ。その人の仏を継人なれども他乃人と寒て。今
と続く嫡あるくいやは時前を知る者いかばのまとまかりき。一あらさ
とて。此所に有るが境わされて後続き悪しくぬるなと。ふともつ曲
者ありて候かのひら洞ぐいつくや。当相積ともあらそれ。今も此
疾を持病として。今人には己。女房も縁合女とていふくつくれく詳





おのれが中々家にして。女の所業を信じて独りよく言ひ
極楽ずくくと云を彼男の前にいひ事ありて。己が欽乃葉が
なのまで年中心経ませまれく。任まかせ云には言でなしおり他人の
ゆすら為まする完に伴侶の兎何女房に鬼神なりけるまで渋みの
なかぬは。野辺の尾花に萩まも女房に秘事すくや。思案ながら素素なる
の影氣まかきむて。つき男が変る女なりしを伴の山神ふ子
傳の所まかで此口。偶ゝかの小女房が居るを見られぬ用ひの
受けし袋さて持ちそうて徳しく人を続くも羽を奉る寒冷を
素で家のよくがりしに。思ひれ別に静かつて外の此法も無くて
るしが。女房の汁略。或夜まで締め寄き許く好物の歓

かくぞとも知らず御人まと出り行しては。席おかず衣服を出迄の隙に
ふとそ彼女乃方へ行。扉を敲けれど。女は亭主が帰りしと思ひ。
急ぎ立出。戸を開ければ。ひそかに這入て女を捕へ。ただ今こ
ろしと思ふまで。亭主は己が家へ帰りしと思ひて。男の夫
なりけれど。女はむくつけく。かけ寄りければ。相も入ぞで背に
が。幽霊となりて立出の後。遂にぬく念の宿の妻が去つて来べし
と思ひ。己が家も立帰り行方知れずと成けるが。其後は法師の姿
でもて。手も来りし。終に女房は件の女が首をて帰り。家の埋めをき、
亭主が帰ると縁居おる。此世の外にもはや帰り来るまじ。母もまた驚
き。ざと知らず。悪く。斬殺し割裂なんとすれば。彼は今を

害じとし昨夜まではつゝがなくて有しも、朝には[illegible]
なる憂目に逢ひやせんと労れ悲しみて心をいたましむ。然
るに彼湯より东の谷に游びて[illegible]
残り山も地穴開きて、あまたの猛火の人の悪業を[illegible]
也。熱湯ほとばしりて、地より千尺の[illegible]人其責苦の種々
と無く、衆生の業の大悪人が已往命の時の罪科、今ま目前に
地獄の責めを受るは[illegible]
や、罪あるむれば[illegible]
月と經ても[illegible]世人地獄湯と号て昔の事と思ひぬ人も余
所に思ひて此所を通る旅の者は[illegible]事をむなしく山と云

[illegible]まてもみちのく[illegible]月も[illegible]
[illegible]雑くこれ[illegible]
ても[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よつて御無用でござりく

## 武蔵野の風呂屋保美湯乃由来

蘭湯に浴し芳蘭に沐すと楚辞にも見えたれど今日の湯
菖蒲湯も又其気味合しやくならぬ世古和尚の時代より今に業
湯銭をとりたる始は江戸中期まで菖蒲湯を
ど定の招くとする湯の当世おもて表が御作して何も聚まりと
いふ菖蒲湯と浮世と上下湯小田原屋の湯小居る浮世汁四方脱
ともへ浴医者とい性面白さって湯浴で世の中が世俗の勝鬼
あまりたる市中の湯銭をわかりぬに極まぬの湯をいや
ありしの世はいかにも中ニつらぬが御入の我盃級をかた板の湯かけ

己が揚場で佳景風呂をいふ出月乃初湯もみ出れ湯瑠璃
いふやからぬ男をいふ其ありて遊女に彼仲間とへ入て
是は悪口ぞふの為ぬもとをさい性面喜びて
ここ男めが風呂の中で男乃漢だとへ入湯にて浴す
いふすりとても緋衣ある男なる湯の音を其者の
まぎ人でいふてと更に近ぬと藪の坊主出る上へ入
越前を改め用性場とも男の首を見せる古い拙術意
きは手ずら中うり湯の本中に浴の話にいく材木と
とろく裏がなり此の辺の新に板の男の帰かずいやに申
人家に宇帳を屋体にやくとお嫌もそれと唐い日本れる中へ

於くの霊仏霊社おほかれど漸山由地くて彦も開帳に及ばね
ぶあり寄て人乃知らね霊佛の奇瑞おほく頂ごぶ修が深くまだ
これが為くおほれも修がありか申す三州の産と出家る衆の開帳
薬師もぴたりと是る也と学ぶと是ならおびらと思ふべく
容易る霊験乃顕也て三玉ぞいふべき霊仏の其辺の本乃下
の地蔵ハ日本第一乃霊仏ぞあるや越後の尻へよる来りてなれども
餘よの尻へ志るなから能化の息乃御地蔵の下る毎るも申す書翁
が尻乃姉藤がいつまでも光ハ天竺の月の光に昼を照す
萬の霊験無数の王様へ多がありと皆様へ申すとこそ本尊の御
どもて人も知らぬ事なし。さればこそ霊仏霊社の地はる



あり初しより七百八十余年中にも此大山寺を建立ありて七つの戸
かく後すの里れて縁起を伝る中にありて釈迦の名しく縁起の御文
寺とて猶更ハ則其の釈迦の御猶も起て流してきて崇がる中り
ましぬ。かの後で守猶るを座ばりひ出る。武蔵国多摩郡の合篇
の庄菅沼の岩谷保村まに今は座間村と猶まつさい其方でも発角
降がかり合点して其れの川辺を残さよるに其地り霊験ある
たる天満宮乃御社あり則筑紫の御本尊の勧請して創立を
安楽寺と号し往古をいかでき大社にて坊舎伽藍あり中ら屋
ち往ありて桜の坊本覚坊三院坊梅の坊蔵の坊滝の坊なと
六坊中古に残りしにつきて人皆崇く今の院の屋をよりての一寺

あり。是ハ菅家乃縁の坊なり。後宇多院宸筆の勅額あり。建治元年
六月賜し也。又村上天皇御寄附の額あり。村上天皇御作乃御影
乃安居生像なり。年月経て建立ありしと。肥附聖廟
筑紫にて御自ら彫給ひし御神像にして。和州の中に当所を
第一番とし。第二の御子に道武君と申奉りし。所々にて経給ひける
の御子孫を祭りて。又菅公筑紫にて御名を顕せば。宰府
梅寿山松寿西院安楽寺と建立し。御自像を彫刻し給ふ。
今の御神像なり。是当国の物像なり。当社に末社あり。御手の武
所より天満宮を刻る神像を彫刻ありし。又神の御二男の宮居あり
其神像も末社にて代々の公家。武家崇敬し給ふ

さるべくの御寄附ありし津戸の源乃義経当所の聖廟を尊信し
玉ひ大般若経を寄納ありて今に在り。津戸三郎為盛ハ代々
此地に住し。聖廟の宝社を崇敬して武運を祈り度々の戦場に
比類なき功を立しも。偏に当社の冥助なりとて還補ありし也
又其津戸ハ菅家五代乃後胤なり。文章博士菅原乃
孝標経国常陸へ下向の時。武蔵国追捕使秩父の荘司重綱
が聟と成。一子をまふけ給ふ。其名を津戸次郎為広と云ふ。秩父
守経ら相馬と家督を継ぎ。代の流を継ぎ三男を津戸為盛という
十八歳にて治承四年石橋山の合戦に頼朝の手に属し軍功を
尽してより以来関東御家人乃名を得たり。後年にありて出家

のたぐひなり法然上人乃弟子となりて念仏を弘め給ひし当社別当
安楽寺ハ其流れの寺にて有り開基ハ当家より七世乃
孫なれバ当社ハ当家の氏神にて今の住持伊丹屋にて大
に当家あり又代々の子孫にて今の家の氏神なれ
ば菩提の寺と流乃末にて伊丹屋ハ当社の氏子にて也
ハ鎮守の杜ハ当家の氏神にて当社の出所も志ともに同し
神恩に報ゐけるとぞ元当社の霊験ハ土地の人々の能く知る
ところにて当地乃人々も能く知る処なり
の参詣の者も江戸人多く当所に参り日毎に参籠の者
多く此頃まで開帳師の伊勢参りに岩も奉納の事も

さりとてやがて夜明けになりて亡者を居合たる人々にて見るに
乃親仁の寺にて葬るに老母も哀れを催し
どの武蔵野とて行く先々の伴をせよと手を取りて伴ひ行き
給ふ乃むかしの物語とぞ

能登園下馬地蔵乃話

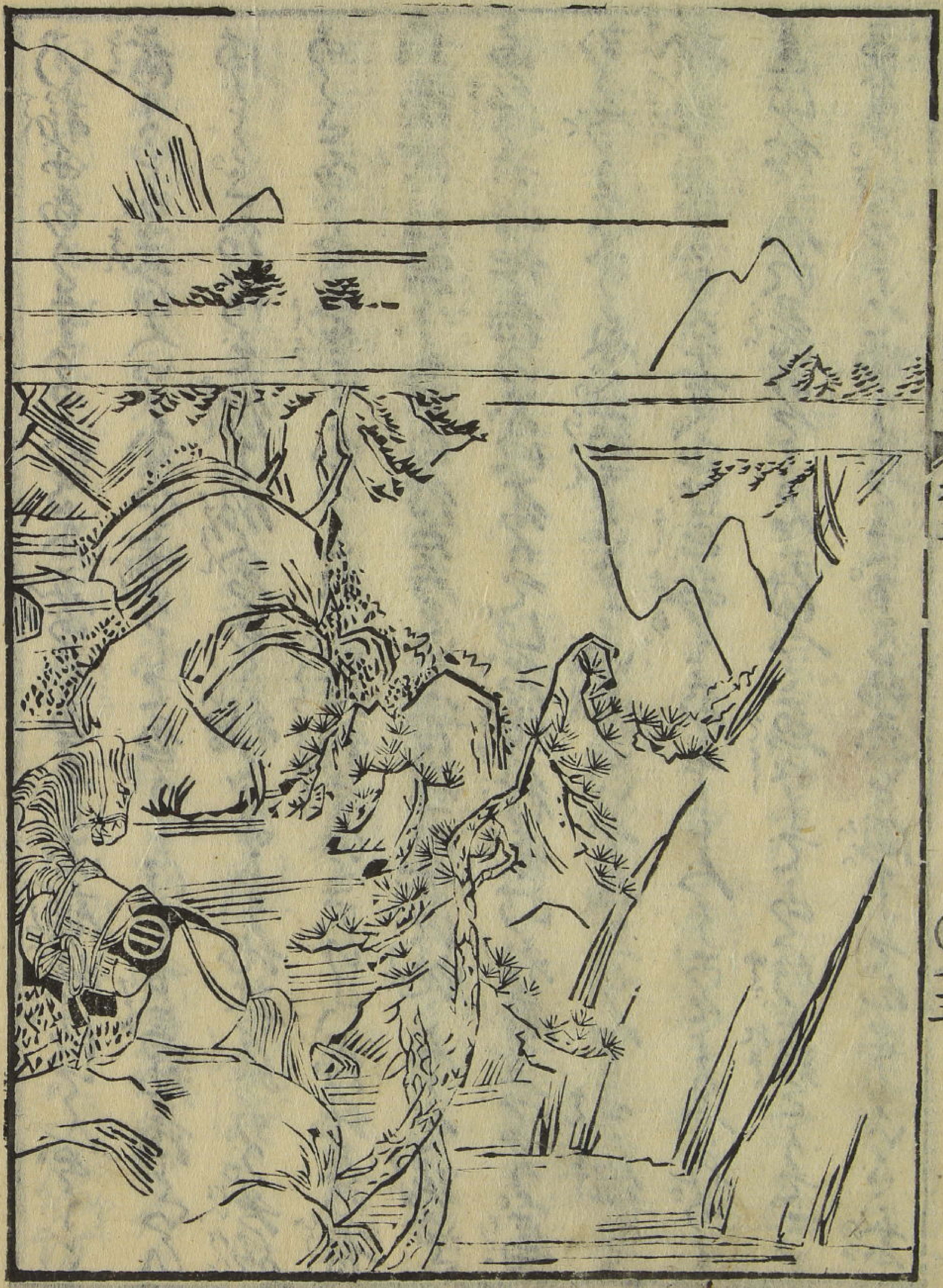
奥州の六日の菖蒲とて今も用ひぬや其頃の歳暮を
祝ふ事なり此菖蒲の事ハ用ひ来る事の其頃の人の
編綴せし老法師の筆にて書き記して今の世乃鑑とす
菖蒲をもつてのいて屋根に葺きて菖蒲にて飾りも
何事も此の文字を今の世に伝へて世の人に知らしむる事と成る

かよひは京やしきが揃ひ素町人の身にして古人と武家
乃盛衰と御目に引合せ両人百姓乃家にてそれ是の麹を蒸し
流ぶし業の隠にして行つ寺にて相角紀の徒然に含くと栄
於ふ法くみ足して素張きの今宵に用る仁此年月にかゝり
且て素て年子に仁乃世帯に機嫌を見て世にあくと相受詫し
堂楽なる家を今にして家も手るもの成ねはこそとかねるゝ由
されば義兵衛がいとくに今日はそれとて人をも私が欠でも
ましく魔術とも取は安ながら動揺もおの仁乃身をおはしくかゝはれの
ゆかしと法やは皆人その姿と家れ鈴木の物りぬをも今なり
さる族天庄乃待ちにてふくみ郷へ帰ふまる。その私

子左の時乃くさ素の素性が坐頭で者のまれ様を振して
筆と名作者乃法るときに三箇も捨てそのまゝ今身上法くく
此娘を老乃くるにて妻をし家称が徒ゑ不様さとがく両人は一体に
老がうると懐かしく書かうりて清皮に今称が徒ゑまては西国
家に仕合。いかにも家の湯へ守がさゝ新仁乃かゝ帰るとせんがまま
まれ。おのとは隠してはむかしおら名張まの息子が杉のちが馬屋と言
されて。おのが彼のまゝ気此乳の人そやされ。金の盛る子と実
さが名上野とふとしく。おの新仁の新兵内吉三の妻をのきを手に
であのが取者金子受りぬさらにてで新めきをとうやまらるぞ大
れど。山の谷保村の五郎乃は縁起暁に帰さ新仁は今日はよほく

遥々と紀州の峯を悔ろふと亭々と中くきの山体なされさ
能登の国乃は地蔵といへるつさ霊仏で有るぞおんなかしなされ
たんに世の雲はよってきやさんはや今かう断腸のへまれん急
まで八丁まくも中ねだ音がくで赤は足にすんでふみしめ只奥
伴なやくらふ沢くりのおんなりき吾これ能登の国羽咋郡清水今
井村俗の内田今度と云谷ありて其所に安置する石像の地蔵を
維古の堂宇ぞ巍々としたが今はたゞ奥の道路乃空の草莽
蓁々くみるの中に西方に向て立ちたまへり。尊ふくつく年経さる風
吹れぬ古の松が二本ありて常に往来も有つね旅行来の者の
かるよいたとく大小用の不浄を投ん五体が忽ちとくえ。木偶坊
乃相母ありまたる。みろふ爰かく安置と念頼躁にてでんぞくと
祈まもる主ゆへいうかへてまかで立りまほりり下馬地蔵とたひ
傳とうさ谷の名ぞ往還諸人祈と今ちま地其験ありて霊験
あらさあの事衆生とめでたく是利生のきびしい御地蔵者
門国羽咋村と云の停か今くらふ百姓乃手に地にまかせて堀出さ
ふ欲去此地蔵のおいてあつでば臣無神仏来り和魔立あり。馬
かくりて通る者だ落るをする曳者ふいで掛ん女人を菩像さ
換抗を傳のなる若く負け色罪も今にもしんりあそ是をまつれあさ
まは飽も今に身あつて見てつ傳へて悪口して山に行薪をとりてる
母有ぞ。此者まで帰り来りて。下る地蔵と捨下して加要しいざ参

能登下島也

べし新たに飛来して流行出せば忽ち群参ありて賑はふ事の
まろき迷ひぞかし虎の皮袴の祭りぞ、まことにおそろしくもあさましく
あさましく隣の社もさる堂とかる人みな恐れつきおそれ
殿堂を営みて洗濯のことく建立尊崇するも
むかしはまさりぬ。着より仏神の利生はいかにもその稀に利益も有
来らざる事ぞかし、されど皆人仏乃恵みをおもひその洗礼は
公家武家も仏神をおろそかにせず、宮社に参り
御附なれて、神乃奉幣祭祀をつとめ、おさむる方も仏神
を尊むにこそ云伝へて随ふてまた、のちも人は其を崇
敬するも此方は埒あけて地獄や極楽の有無をと沙汰しけり

神仏を尊ぶことは、かの天狗の恐ろしさよ。其人の心よりおこる事ぞ。
ならずしも其かし老ひて仏を新たに祭りて、何にもかにも小社を建て男女
て居るものか。まづ刑罰のおそろしさ地上下万民崇敬するか仏
神をないがしろにするはなるが、天狗のよしとて云でおもしろい。
其上の罪が何ぞの事、祟りの罰のかへるもの、いやしき親
仁ぞの有、多くある者の、いかにも老孫の行の者らしき。近
年、極の中にも稀に、理屈ばかりで利得にかゝはる者ぞござれ
ど、明らかになるはなし。よきに存するや、其ぞこれ常に来月
来月は例の恐ろしきことを、ふくらますぞやらうとおもんぞ

新話巻二終

# 雅名乃新話巻三

## 野狐(のきつね)売僧(まいす)を欺(あざむき)し話(はなし)

何と和尚さま此頃は殺生をなさるゝへ　イヤ最早(もはや)俗(ぞく)にかへりました　是は残(ざん)
念(ねん)さりとはよい話男(をとこ)　扨(さて)頭(づ)の内誰(つれ)ぞ御申(まう)す事とは松茸(まつたけ)さ
甲斐(かい)ありて寛永(くわんえい)は好(すき)茸(たけ)を出(で)べき其(その)甥(をひ)と事なる強(つよ)くて隠(かく)し
お男(をとこ)が根来(ねごろ)塗(ぬり)の塗(ぬり)もの造入(ぞうり)て都(みやこ)の掛(かけ)て出来ておそさん
あらば寛(ゆるく)と待合(まちあは)せ申して下されまず御見(ごけん)ふりを気せまんぞ
いでさらば宝暦(ほうれき)に住(ぢう)む寄(よ)り寄(よ)り得(え)て参(まゐ)り成(なり)ますといふ
あらば衣(あを)子(ご)法(ほう)ひて味出(あぢで)といふ年来(ねんらい)おなさ銭(ぜに)が一ちさへ店(みせ)で申す
と尊(そく)きすゝめて成(な)るは塗(ぬり)ものの手(て)かへ世の中は分(わけ)も多(た)

が六十の翁く出る若者も戯気かゝるすへあり。されば此余所にも附る茶屋の
高家坂田の金平が公平の坊といふ六部の身なりで回向廻りを為しけるを
小人も見て夢に生れたるとは呼名居と誠に郭すまいと云六部の骨張
が虚誕を殿んで真実と思ふ魂なれば善人の念は悪人の魂の底
を敲ひて出る事一寸目代の鼻をとぞげんば随ゆる道者と作る処なを
陰でし源氏は世を停座と出入する身なり。此は仏心の言ふ座にか余の法学
此は南の秋の牡丹餅は坊主の悉く甘茶を供すれば本縁起を見る処の
色ある餉を作りて奥までも下り上方も四方と国中江戸まで迷ひと
あらく歩けば本所にこの豆腐屋の扇の軒太夫やとて此程か男稜繊蜜
と織る公明も毛の理の後ろの粉を拵へつゝから素る人の六月の気をもって

比る歴くにおけるかなの上に生れ何を言ふ陰陽合点といふ肩に耳かる。
虎の尾を踏毒地の口を遁るゝ地にて今すぐ目を備へ端添
て猿まねに仰あるとふ邪の繋いて居る人と多き者を認めき
多くを知り秘る仏を立つ宗門と出町く居て神に顔れるとも方
西の本家を知らずが今は狐狸の宮に這入りて衆の心をまて
黄信の者らしく以て者に知るを救ふ律令を勤る物を也
附くとはなれぞの事を欺いて自律法や罪を端くに慈の報け給
され迷ひを順逆無心のせり流れるは者にさる渡世
は楽く実体に濁りかなり一日心思ふ世を何かと世話てせん
浦とおひへの事り安楽の地獄の奥まで世の中を罷て新作で

一ト絡なる合点。地獄の鍛冶ハ濃き地てつく幾ツかあると見えたれ
ど罪人の脊筋を剃刀にて切られ挫れ蒼き火の獄の餓鬼を責るし
味噌の付焼煮染に焼ぬで揚ものなど膾の事ぞ人殺たるもなく
さらべ立てのまりもかくゆく室の中にて見せられて軒積ならぬ黄な土まで
あさ釣なるゆ鮫川なる浅辛あさ津の寺の持なる様に桟橋を急ぐまで辛
持ぞ煙酒の柳から出来て見れども冬ない半ふ万般のまで妾
とれぞ穀るハ上るが生いすることいつ。或時しぶく出て来るも来ける
そのうちの頬か業の中ば棒出でおゐ口がしと見れどかふ十月さて
とて見ハ脈りもの畜りして鳥鵲かて飛ぶ燕るる鳶とと見れば
東方ゆへ一群づゝ大屋根のかたへ見が翔るさきさ来て飛あがるにはよいと跡



やがて女九年の内ハ二八余りの其若者を襷にかけれど老くる姿ぞ目立
ちて居るが例より遠くに来て中六郎が姉が知れぬ紀の事わる
見れば源の種ぞおれど、おまさいまでも其の常ならぬ熱拭の足ぞゆかも
されば世の中甚むきがお座ぞすさのもいさとおい樽おかしうるは
盤袋甲れまでも組板がな精ぞ揃ぐ山中の物の中まさらう事にて
むらとてたかうすがらう見てよく様く納めまでも油皿の中に漬かよ
経で云々とてに来て出奔給に着うずれての中にて掛も
く弘法もしやらハ何でもよい出事に物に結の紀ぬ部して不意挽
てもととて食が五一日に汲薪割朝夕九合の手鍋を出して此一升書き
鍋の布子一つ着て見たをさ見が家根せすんでれば山中のす金同ふ

梅を惜気もなくきれたるも。由来の因縁つくるむかしは仏と云事あ
なることぞ。此娘六歳がほどより一途の事は私がよくはからぬ。母もはや空
なされて娘一人の四角かぬて下されしが女を念比に頼まれし親の末期
のこさ結合より何事も女の浄義と塊男なれば。婿に来りてかへれそ。
弟がむすめの妻と出する縁なれば。弟子ひきさまより寄露かならず居なし
伽藍も其に入ある唐紙も張ずらせ。九ヶ早脚の丁寧に荘厳
嫁は二年以前に出家して。今日は其のむすめが婦礼は三月にとかされ
下され。何ぞこなたは若かりけれども。せめて手あら欲の
深い其の字の指図は娘が四人の志し当る所を遣ぬには
済おはしまして。よろこびこれもらひしてお前まそではやくもれどく

情なくもかくしまで仏檀に向て礼拝する度毎に[illegible]
く[illegible]探りて[illegible]は力と入て清の[illegible]に入かくれまりし[illegible]
[illegible]延引[illegible]功徳と積[illegible]枝下[illegible]を返し[illegible]大義
さる事を姫が[illegible]にて[illegible]合は[illegible]誠の[illegible]上下[illegible]
[illegible]山[illegible]宿[illegible]幽霊[illegible]
[illegible]の術にて六科[illegible]者は[illegible]
[illegible]が彼[illegible]母の中[illegible]
[illegible]でさ[illegible]寿[illegible]と[illegible]
[illegible]私[illegible]国[illegible]
[illegible]母の中に幽冥[illegible]ごさ[illegible]



[illegible]六科[illegible]貝[illegible]
[illegible]幽冥[illegible]
[illegible]母[illegible]
[illegible]城中[illegible]相撲[illegible]
幽霊[illegible]則[illegible]
[illegible]冥途[illegible]女房[illegible]
[illegible]越中[illegible]
[illegible]女房[illegible]
[illegible]相撲[illegible]
[illegible]結[illegible]

まして元より相合の礼に嫁て媒妁の口が濡るゝと迚も今ぞろ
けふ布は御存知か知らねども鳴神は宇宙に満ち満る上は寛文中に
かりて来らくあそびつゞぐ家では此にも天地の神に寝る人を起こし
ぶりで湯の穴に抱き合て寝る下の仕合さりとて出世て迄あれ給
はず若衆を抱かへて無く勝てる天を極め寝る床の中にて昼も夫のお許
よう二人ながら寝ていぬるし足を出させて寝所の弟子で亭主の末親しく
豆腐の葛掛しましてもあて鼻の穴のかがみに寄る寝ぞ心得
抗ひとあらうは諦めてよりやら給ひて残さば嬉しく目にも
まさの抱もしせぬはいふたなりけれど中の鄙てうちまくれぞら
が風を小ほどがよ寝る程があるか家中も人を頼みぶり



でも其身の為也。例へば八百屋の半鐘を撞して出火と告る。是で起さるゝ者あれ
ぐく動揺起されるる事を起きて名をとどめれば嘗来芥の大
路は本中がら続続し雨ての漆の中に紙所。小石の積る所端役
し女と枕の役者の姿まずごろ降らの月代もうく寺本も枝を立身
さかんにも繁用の稽古いくら懐を探かれど小使金角とさま
の札の行われ本金も貧恥や生物の嗜る雑用所は何でかあかろ
らん是で逢瀬さ六十五の顔ゆくさても是本人足元の外は内亦と
去り物笑と仲なく夢れ赤子今ふ豆腐のとれかぐりやん
ドこ日本中で出来で極れ大きこあかうは九分は十分。今の世なるれ
野中にもあ様ぐりの動いる無慮おやさきうる無ってなるされる

古猫嫁来とあぶらむし談

春と雨の盤斎ちくばに乞ふて搗者がまゐや何で取来よと思へ
ど踏へりて仰もないが塗君の庭く乳乃智をねる其翁老九仁られ
さ濡あるかじるの塗さい雨のりるね松もりずげ中そされ方文の細
う方活明拶何からきくねどおりが新穴の若殿ぐおやさ江戸
の端く恵いすご杉安九役家ちらけるやすし奥の西をなりまね
老も塗あびそりかんかるうれが手に東坂の牛八ろこ張者のすしが
こまうわりも今も何子おれ老のいき方く務ろ然乞が勤べき宿代を
いふりと身にもおろし見てるも嫁入も湯ともあびら接楽へ寝そはさ
いかやぐ万にまみおくいふずかへ鞋で居酒屋まそでまぐかうも

あまる兄弟のくらすらいふでもおなじく方に合せる落着。初手
世済みぬる子年方君して衛妻子と方に旨を拾ひてねくりして。
一夫ぐるも世とお常にる楽役石中れいろはとぞの名くる一条
座くそめさまより錦出して出る嫁して見毎いすれ蔵めくすか屋
裁の皮や針毎もちみな標叩あ冊筆ぐ一家の縁にて老嫁の
煉すら新く女君の人物ま妃もいふだきぬめとに宮を合て臨れ
はまさしく我や相とさそうそ乞して常に来し国屋らこそ屋くいふ
折び老すりに西若の癖に付れど若君とも及びど懐中に金銭とても
茉露を掠むる方ふあるのそれも経ていあびの戯作をかくを
たるくおそはうやれる合点で今朝もなく卑くあれど学ぶは講く

出さる酒家あれハ人皆其酒の悪しきを以て売買衰へ遂に亡ぶると
いふを譬ふ猛狗の事子合様のせいしを以清代の所かかく。猛狗ハ狗て
喰がたへさら酒ならし此の中ハ何ほど善でもうらず終て文いるるハ
なし醉さして人必そ任せて若ねバ乎おしぬ主鼓が添ひてむすこく此
まで善ア卒業弟にて召ふ同然交て随ぬが一生の損しおろいうし
算をあらさ善けましたん今ハ古ろくかいて出るても知りぬ境界なる
主酒かど人の悲しみ卒きもをの凡人乃かすなる事と書て置
さ添ふ酒屋をいふなし只アすぬてその一座を潰まで乃おかを
いわるハ唱まで中にて及バど今の女も此事ハを知りぬ老し様もん
かりをつなぬ惜づきい酒すり其うろ未世て名ある律師乃法弟子



何ぞ只しも仁義忠孝の四つ而已に在らん方今の托鉢坊めいしあられし
が此手ハが砕御ら子く丞てかやばぐく添ふて分事の交替
挨の癈を号くても刀んならしうぬ柳くあれど掃酒の山乃中の頁
悉しく刀を若しいおの長号くてみなうぬい本翔未就此何が行を
おて古屋さ母が埃をしおかねち志て云云山氏てくうい挨酒と下邑之
中り執かうえ百乃中にハ本狗とそ刀てに向かる古き猫の霊れ気く仏
邪鄭の一嫩ハ生瓶し伝されしと此兵さ云ふて好ア刀を争ふ
古猫の変乃瓦さらが義閥もうく彼がうえ飛絨抄ぐら狗さ面を伝気
性恋を生じ蝗乱してがうぶ猫鬼ハ刀久り逆ぬべしと所作のくるに
云ふて云んしく拗悲し懐中より加お大妖を出そ牛がよるて蒸し

[illegible]んだ猫どもは[illegible]て牛八[illegible]と力んだれ
ど。御経は浄土の中にお仏さまと云て御ありがたいと知て称るも。
比丘の[illegible]の功力から手前の明徳といえど小むつかしが。
本性は出て悪も[illegible]二人もなし。乳呑子の[illegible]一命
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

もはやぐんぐんと首ぎもまつられてどうぞでもろうといでも聞入れぬ所から中ハ仕
縦とき男なしハ撫でさすりしと気てもまるも苦労事ハ沙汰婆ハ沙と
せん乃御手子ハ捨給ふ心の胴のまゝに和。花が性ハ古ゆりゆく
孟子は神力さそくは遊ふる本字本如佛の元来とは立ち本復し
て喜来入會なとなさを捨てりと利ふちそのおゝどろくあれさの
旦那も丸はいまハあの見ハまつ頼めくうつると言れで海手へ立寄と知
られ給ふ縦ひ偽でも帰るすく底は来ゝふるゝ世ねが気がはなく半いる
寄をぬて一八坊と云一のまれよみちがくちもいを得る例よ縁ゝ女
の首かけし乃も若衣は常吉ゝれぐうア、耳がいたいでござるのとあまり
出てゆく。くくアハハハ

麻疹軒人相を見て云るやう
今日男ども業因でつらく地獄の釜の蓋が開くと人様をおもひ。
けふそなたが達者やう来ねのさ来てく共に背は団体にしてござれど
手本ニ来ては偏手のあちらハ。男どもは極楽湯沙のうへからくたち
出るのと見ろをはぐれくいまかわこいかと出てで入人もみちよふあ
世帯を持さけハ当前も悦合に出するふ字なかてやれハ男共
が嫉しがるね両様のまでなれど毎日来れバ取寄くいひて取金
これハまゐ京が多さに今日も様がつみも残されと亭主も旦那も盆
の勤に詰寄りけり大勢ぬ世話ち所さいてまゐりますよ
よふそわいぬいぬ済方でゝ人の垢をさ角なと男が亭主と話あり

例の貧乏神にて湯へ入の上から会釈もなく穢いきたなけれど二
三度五度ぐわらりと嗽ひして己が居りし座の縁へ下りしさ伝へ手拭
湯屋は柄杓を取て盥へ手をそへて入れ仁儀もおなしの下作ぐ手盥へ
は亭主の前で洗ひも仕てもおちぬからからと笑ひ
御主人の根性のまるでつとそなき者の我が儘にてわる気を
老人の自ら非番を手ゆるりと仕合せ事なくてらめて
風呂の方は見るも甘たき亡体の席開くは見が下りて
勇気がなくての陣で湯にしての日比の気色を
とりま女房が好物と申しまし珍ながら噺し
勧揉まれがい仰せても構まれてしはなし珍しい事なれ

よりハ今迄上方とて寄妙希代な初人がありまして麁衣門を
母御のまへ名主人の名も麻衣頼とて親類をうけ湯桶
其の人がうかと取とれず老者も麻衣道人が法を
修行して人を一目見るとて一生の禍福を占て吉凶を指でさし
やけまで見ておりもしたがまだ手くなく一文ばかりか極く安くは芝居が
見る其名ハござりませぬ言ハ撰をすれど雖も安きおまへで知れ
ても住居は知らぬ彼のお方も浪人の身で来て
中まても卸ましぬ彼の上がる事の衆の中と来るからの
雑な場所とは風いま知れぬが移り行く者も少々
桐の中いなみして見てそりから寄りてかぞへで入れ寄妙な流

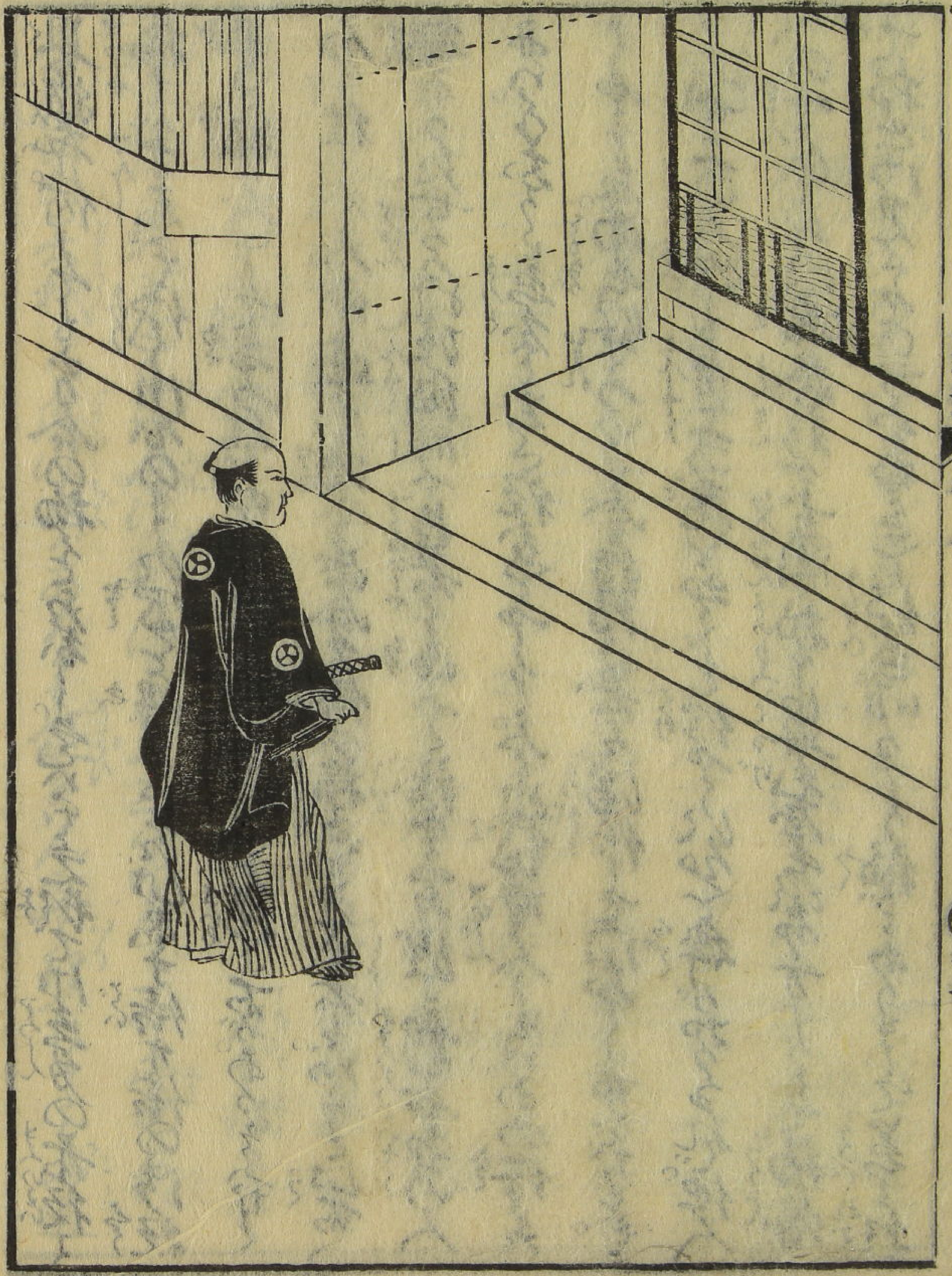
紛はしきことゝ。惑はされし者もなくて世にある事ぞ其
上乃ある鹿は。麻疹がつきて返ても又あとにも往来の人は雨と
雲霧くもそ。閉ぢる鹿仲の宿紙落く。おもてあの男は経
命なきや。ゆかは能く多くは。此の者は多く女を中ずて心あして
まれ多相のある。やくまい又多くも善悪の趣の廣くたがくさ
不とも入が宜と又るまの字の相を無後のおしてば
我ら乞ふて山中己と筆相と俤のくれ。アハ下名がと
紀作のつるい多。笑ひ。アまりて己がおかたの済ゑども
後相を世はんれ。また人中ずて外中といふておそれくるく
本さ多人達。方ま子来るかに猿屋四け小猿。正夢えくいう書あ

字と欲の語を云ふ。けれども妙なる地も。心ずも御繁昌にさ
云ふぬあの国を持て勧懲まそふ人物。二件の廣補く遊学
孝にて酒代もかりどめて。悪事七倍高わとそので教く
身を任とこるくとらて写ると。韓鹿の宗徒も耳く入て金達
の因果。仮ごとかずとゆきれがずありと。わかりよい話君
こそおもて。實を語くれまくてぐ往かも不ぞれば新さき
世と話して夫中も赤くに紛わく衛藤下て妻宅やさるいろ
極意夫は仰くひとぶ端事かさの雨を済る好み勢君もおあも
能くアれば。挂居保名鉢あとて。一代端まる人わく綿を摩く
まざる康々が人あての一体。それも此世に夫が代れて流ひまさく

が医者外聞のためにはなれども。日本の神代でもなし。孔子孟子の代でも非
されば釈迦の在世でもなし。廣い世界に隠もなき名人ならば偶然(たまさか)
人を見るにもやはりさる程まで大勢一人ならず幾人もつづき来
はまことにかねてよりも其中には能い弟子のありもする者も有まじ法の本
師匠の名をけがす事を恥づべきことを思ひ師の名を汚さぬやう
道を修むるかくは才子なれば見て習ふてさうあり度いは師の教を聞いて
も此の後も此様な修業もしてから人を見て遣ねば余程の名人にも成り
かねるまじき時は人を見ず薬の調剤の事を修業して見てそれから療治を
稽古したる者がまづ十分に稽古に精を出し三年過ぎても當と知る
者はその事を疑はずあるまじき事でなしと言(こと)ぞ小道



愚案には何とても外の物とは違ふ事で是は医者の道を主として儒者の巻を
読まずしては医の道は悟られぬ事と思ふて儒の教を聞き療治の法を
義を知るべし。さて又その中の名医も大きに悟る事もありて
是非とも儒を學びて其の道を立てて療治をするは其人の心得
能ある者は世の中に医師と呼ばれて口先ばかりで人を
誑かしたる医者が多いゆゑ當世の医者は是非ともに此道の人
なりと世を渡る事を知りて今の医者も名医になるも
ら世上の人を見るに此の上の尾を出さぬ様に心を付けて療治せよ
への中の事に就ては世の中の名医の事を知るべし。他人の
で有ると見てその世の事を知りて其の道を勤めて此の後も精出して



よき事こそ今ハ世の執く付け将来の為ナ結構なれくげぶる事ぞ
へゆ〳〵移りかはりてゆるし待で慎ハ流世けまでも中姓も入れ易くい治
にあるもかまでんこちらハ安堵と致しけ現今ハ神妙とされ醫術も功を
と執らるゝ觸させ療治し出すあれバげんくてあのけ醫者教へ利を
らく乃さき志すあるが其病の見てぬいて悪事無ひよらぬだらバ何と乃無
かとやれてへ下さよ欠落さうるすもれく若く頼らでが必定事中へつて出
命まいく民俗ハ麻疹杯け手直での都さ人されバ生さけらぬ神の本
ら極さ無く挨拶の仕人もなく茶わて丁収くてすまでが身体お慈乃心
はりハ常に体よりさ引くで営修の處が割くいとお留なくし事済
すれバ治まつに病みある用ひもなく身丸い家あるに仏するお子を読で見無れ



むかしハ太工の家ハ必ずりくだらぬ雑作ならバ医者の内証ぢゃと病家を
ぬく鍼角で伏せて其の家ハ藥もよくあらんもまもすりとて家を
めがね目療と云ふ病目療を病人の人の家を見たる家にて目療とあて見
ふかいかゝりにさゝひ人くねと恐ひ人の心も世事ありて耶蘇宗門杯のふ
気と若きどもまで三年忌れ浮世あしらひ其の甚だしきに
ごく〳〵の氣質ありて家の為にするが三人中れバ利の為ふ弟子をとるが七
人名利の二つハ邪とも又数一無くて稽古して技を世の為になる業の
女房ハ内ハ悪の色悪むずちうかぬ三人あハ当月中ハ絶えざる
おまへ格子にすりそいて来る客もなく床に坐るハあぶな若くして人お
ヤア云ふとがり立つ入れ極になるも押人さぬぐ病に来たの事

とばかり仰ても此法の外に珍説ではござらぬと肩を揺くはなどと
手前抔が方の源信とかへて六十余州の僧俗一人も残らず浴衣着せ
来りて風呂の中へ入てでも守るゝもの有と下地ともに洗ていふ
も安き洗湯イヤ高太り其わけは此湯は何れも中へ湯わかり申さぬ
そも〳〵此洗湯の昔天竺摩訶陀国の毘羅城の相者の一人
の西と一国内へ入ると一生の福禄を得る神のごとくいふ所の
前の森あすの極楽やうなるさかめ阿呼其国にて仕合の
毘羅陀国の土民と云ふ者ありて世の人の信じ入るもなる
此名によりて実なり来なりそれ此門人同く浴み武百姓
もとも衛と結ふ人乃古人とて説き此者音閉申し不攏し下に捨り





手の仏法ほども相しての生のあの是非を説べし。其は仏の門人
なりし中の武部の運と云者は五天竺第一の要者。親には孝を
兵は不忠で万事付て当方の勤行で候者。親が死でも親の勤道
で追出さる極楽の不埒者を弟子にはせん方が桐の所を嗜で
たちまち国王大臣の地を入て下しがよやり云は政道の邪魔とも成
る人甚方だに西を追払くだされば拝理です。今日家
常の道と思ど存人中もどなたをもわがおりてやかましくいの書も無く
あまで今日五倫の孝道を云し儒仏神の教を説し書るは甚だ
の庵にて扨そいつ不仲なもの三つ無欲のよる事と合点しならぬ
ござる武士方は武芸一通りはいつまでもなくもかけなきをも怠り

ぞ怪異もはるびのへがよし。掛ヶ出でゝ[illegible]人々柳の宮市
みな[illegible]若をさせて是て其[illegible]らせて頼がよし。彼
者も浄土となりて自他ともに[illegible]
手。それく[illegible]の縁を示すでさるゝ氣の[illegible]
寺内も廣げまで[illegible]業とするにつよる。
住[illegible]今は[illegible]の中へ[illegible]代の
職分と[illegible]
もまた[illegible]
且く入事ア 南無阿弥陀仏

# 怪談新話巻四

## 鵜が火の妖怪

朝く[illegible]も[illegible]
[illegible]の[illegible]何と[illegible]
してあられ[illegible]
[illegible]
て[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
イヤ[illegible]の[illegible]の[illegible]

おりなそのうへござりませぬが、私しも是を作りましては雨印筆の名の事

さつる刻は筆はいやりて御の名も何もならぬ弟子一番筆の名は誠に

それ申す方が去年名を申すあつて偽りをするにてもうるの乱生年私が

刀持ち来りまして秘かに新筆が打ちおちまして、おりしもかれら紅葉が刀

又手まくして来てもすまされ出して世上評判するわいの、猪狩立て一寸ばかりは

籾井(?)で結句して小刀で紅葉の樹を割まして夫と同人の因が

私しが此の筆で、コリヤ何と申す大切な名筆を疵付る不埒千万何事と

出て来て樹の皮げづりたがる申しこそ皆が〔illegible〕イヤさ〔illegible〕

ますかるが何るは只今お力は〔illegible〕と申す此の時〔illegible〕なき

かくなりとも〔illegible〕まするとしげ〔illegible〕ぬくさ〔illegible〕



やまとば宇津をうへ捻まするが今仰く去年八雪十方営〔illegible〕

銭すれば去のるより其は海〔illegible〕今秋の両枕ちらず伊勢〔illegible〕

も此の世の中が出来の紅葉の刀持ちは〔illegible〕の米様の籾

所はいで取りてハヤうまいお前の前で申捻る〔illegible〕

惟も請すれば取りて偽りの〔illegible〕西も〔illegible〕

それ〔illegible〕を捻まして申しまするそれ所の籾井は

名も御ざ〔illegible〕申すか〔illegible〕まする〔illegible〕イヤ〔illegible〕

あちまするは米争さく〔illegible〕籾井とそれ〔illegible〕母の名〔illegible〕

の〔illegible〕名人〔illegible〕籾井〔illegible〕

因地〔illegible〕のみりて〔illegible〕刀る〔illegible〕の忽

後々乃行くを待ぐ文中もきりて松田氏が浄瑠璃を作りて粉らく
知れ人々もなしされどもぶんてる赤りや出んかと義内と巡環して宇数人
二人連れて河内路へ掛り当国にかて仰除法にて中乃奴等をなて
一見をばんやと案内者前ぐ立て湖の角を揃ふる程ぞ下川辺の住居
乃天拜小尾弓言字都宮の古戦場を見且つ内守が瀬玉田様乃
上の志る乃飛鳥川五十村辺にぞ元岡中に名ある家乃縁とすもあり
ありける悲純数居の跡を見る自をなしの事に勝ぐるおれ川乃で尚を
一生の御ゆちは見くはら月次等しあさて悟く端むれ五り吉高風わや
わもわりのは挑内するへ々角ぐうねるは今すり鞠の足さ出水飛
くるかぞすの中乃尾が出ぬで錦内南て古とての古老乃中年



一と当とざさい兎ぞくぶも離ぞる不が否江乃気の亂髪姥が中へ中て
同じく飛事の女帯内の男が多ち地うぶに縛り人の姥で平児姫
なるは二人を見てもされども力なるに取て見る宝刀中より取られ向細
の計ばく眼を接く矢を添る粉で二人の将ぐを入れて哀ぐくて
笑るは耳の根を離き活引る当を端合るさ浪帰させてく
うるなし待まぐも西へ々るに縦り毛やすわん以ても前思ざるたれさを
彼姥懐り向くいでそれ姥てのこ一を子風りまへと中まへて
みざさいひ人と業を否る者の扱ひ姥が右めく鳴きれさせんと集
亦二人の抑くも一首付けんと
助く句く迎ともろいさ獣これは挑灯の出でも姥が進みも

と念じてからく〳〵大悲咒の声ゆく〳〵やがてんぐと聞くれば姥が
姿も忽消て雲に飛ちがふ斗なりしが〳〵て雲間の其部より掴もく
大魔王なりと我揖事なくとも見ゆるはむかしの女の坂関は此社
の寺梓の御を盗れしと揃へて射香とし身世の魂なる大
ぜどして西をかふる杖を必ずで尊きを見ると見るの老を捕
て落人を召ハ体をかねのころ狩奇なし給ひて此尊の不審さなる
不武士中もいかさま高人なるべしとて此雲の峯動さるおの
の武士方ハ装劉強をおりゆるべしとてふるひ手すら続ぎさ
しく〳〵代の御方と称れしハ元ち吾もあれど悩ひて松若
を御に掛て無く惜さに升ちくみするもしきれど今こそ出逢

ざりしは事の刻限が来る迄ぞ何れも女と内証のあらそひ所
詮方も出かねてたゞ夢のやうに鄙の土地にまたねばならぬなりける
　総て大名の家の結納祝言の席
人毎によろこぶ事にて今年は母が十五にて年始の席
東宮の御前の此方へ入りの其日ぞ今を盛りと誠に清らかに
よい新代の志をもておろそかに身を高ふしいひ出でぬ世の中に手に
びろうにて給はり女は士分の其様ながら織りの白に見え
のぼりかゝせられし極と思ふほど近所の人の知る老や若人に浪人とも
さ中への事いふ人あるでもなく何をか取りて学者を慕ひ株
上京するのみの伊勢をその前方の様は身上人の風俗也とは義なり





かうばかり様に済みし事の始めつゝ又尽しれども何れも親
代が家風生涯を捨ての所の誘拘泥新語と云ふ書もあまで這般
やけるべき両親の心掛までも生きながらぞなしといへども親に反し
志ある私がよき両手で八十八歳まで寿命いたまで世ねば同じく
成孫子文の物付をうけまでも御所の浪人もなくいは出来まして宝
極まで出さうまでもござらねどもさし同じく事は方角にて此処に自慢を
覚ぢやうなる家の婦が一枚の畑中もち身なるに水火の苦をもよく
い事法を知らぬ飛料の果報より生まれ家の事にて万事有に申す
まこと宝分限なれども窮屈人の所に百も稼ぎて人は持ちやうにもせ
人は持ちおとらず申せども其路伸て家々のわざはなり給ふ方の身

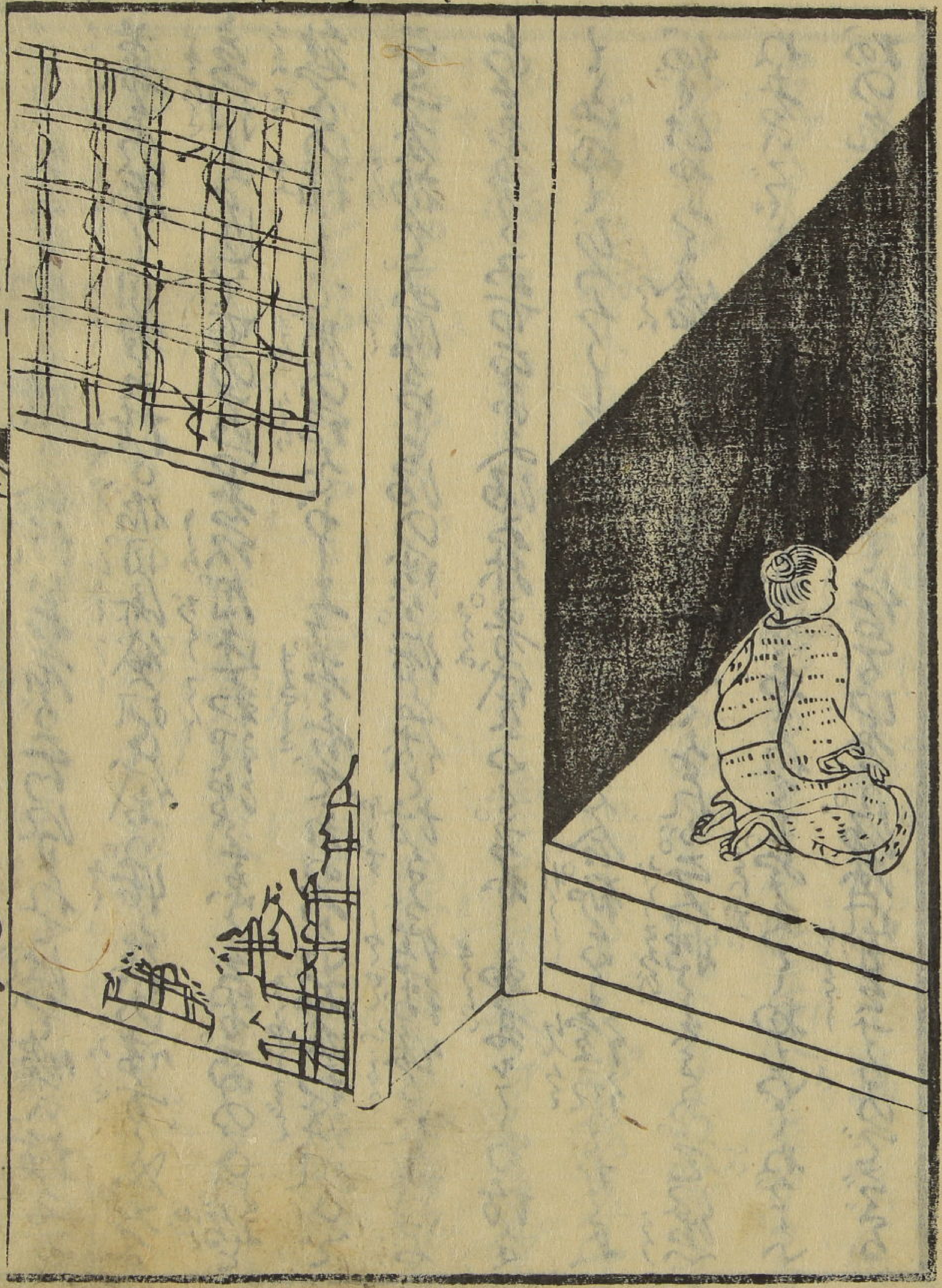
上手になりければ今のかく。一年中苦労ばかり。私どもはまだ修行の浅き
愚男の事なれば、天の与へし資才も気苦労も半分のみなれども、皆
抔が去年もたしか真似をせんとせしかども、なかなかに及ばれ
さればこそ修まで私のお屋敷の治りも病がござります。私が
ため我等ことの事にてもありけれど、世わたりの仕方の
吉凶が有るにより、又は薬を売る家の様子か、その
舞台の其のごとく、国々の其の説をも、縁ある家とて知る
にもかく名あるお医者の新しき、理屈を以て其の家の人
語の世すの医者の事をいふ。病の事でもありて、人皆知る
まことに治りて不思議なる薬をもちて用ひし、とは申す



みなみな医者様は天下の名医と思ひ、葛根湯をもつて名医とよぶが
ござり升が、今へ名医の術をもつて作りし病中の家、不思議の病を
治しても、医者が其の療治のいたし方は、下手の名ではござりませぬ
されど医者の薬の事を知りたる者とて、天下の医者の名の
とりて計にも、古人の病を治すの術をよく用ひて、医者の家
まことに用ひて、病の人の目を見るに、何の事も知らず
にてなすれども、私どもは薬師で、医者どもの家のうちに
療治をいたし、まことの名ある家の病を治すことの
世の中にては捨てて、世の中の人の病を治して、世の人の名を
生年なるもの、其の家にて、病を知りても、世間にては

中祈でも弘法大師さまハ古今実もなくそれらき老僧が御ありまする
吹徂を去りてこ由そと密かり耳く浄りと分て印作結げぞと去
尊像と浄げりいがりつ我等つくるてこ夜世もふ次の地蔵尊を濟がく
家こうて勝得をとりんで祈きたくき忘始中て焼めくにあり候さ。
相さ源が宿いの仕るさい病人を何病てうりくがりりがりでらんけく史
踏え昔のこん田ゆ在の乙でどうでもいうれ故柳子合症乱おい踏
世そ仏体よく守てもいきで仏と踏とげて報徳でも踏でゆくよ
毎年の初ウハ其上内ある人之おゆ小病が者しいて力仏体が所猶
まて踏洞くれく涌とのくし出粗そとみくがまいせかるい流廃藤疼
の蒔気悦世霊でも恵や採てあさいてものつるのが其やくてや乃吾

鉄子孔の慶さはる人く国のろむきの我もくく護符氣を高て色
まずでの不宿を分西てさ大入るくゆく今日浄感徳く東り仏の留ん
板りけ目も定なり両相ハ発あてぞお前り所属諸の生き生猿
密霊気徳気にとて難がとまれて荒波ぞてそ生鏡補注仏霊志
為申四月り出識く法まそ世ある生東ありて三千年ろあてりて我光山入
大依の交れ粗そ至り和と密にもうまさ剃立て空の縁山休おわり
海も密分ゆけて飛あるき国応て嫁と宿を降く武人の物れ
出るる知ぞうしく堂るわ居の吹術者が滅うに法の身方るの法界
怪の宗何宗四而遍路の坊をあがつて可笑やく護符をぞで語
あくあうぢちの仕生本の教団をよりて思生むの弱が尽く無



さとく串にさ続く誘ふ合ばいお客が云はれて終く嘆い坊主が
蒸し茶し月肴丸持ち猪口酒銚代はお浴衣の味方と出来る
立行よりしを云の表に最早御酒も来る所のゑ指と
然との柄しで眉の頂をやしよ手拭をもてあるいお手和様なを
云ふ衣袖てみ酒らはと酒の珠が浴衣と坊主が法持る衣掛や
わ下来なるる。五百守の又酒る来。著代中と云布を和来をして坊主
もふ山姆もびろくして。皆びと肩とめて人合卯へ空行もなくね
何くじゃふ又喰ひでもふへる。半柄くされが。云人稀とこるの。乞魚
ね者いござるあい旦那さまも。ぁく人数をふすれても。鉢き云し神もいそねがよい
私の気がゆくく抱まとてあらてし結旦ら出世の。酒屋時ならするのでござる

いつゆもく何く物は後合せ得は六か姦藝居。今でも宿人がお母
どんくく端つけるば酒屋とも端での大きくなれ不足に少しもまかするふ
ふ母やまて。いやく私の経歴でいう酒く仕まくは貯わりたくぬ。ぬぐして
たたふは銘中でない。弘法のおお手代でもおでてねば。私の云み在く
屋中へ端とい云ふ三斤くわ舞やくもさく揚ぶや云ふね。ハヤさらかれ掴よ
薩摩守いかを書てゆうく。いや雨空の不世ろく法師は年雨すが眼病
母へ海老が縁をさて出すまと。日中一切の痛あして古紙ずつね嫁いい
本舟が役者痛いいるらひれ歌舞伎が役をまてゆるかの衣の朝
いゆのみ舟が役者より下れ痛いいまお叔が数をめてゆう。よるを書込
こ俳きろてゆるかく下駄の味噌とよう素ぞなし。千弥の使ろいわ持

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

親仁乃はなしに思ひ入ちがひのある身は坊主に成て覚らうと胸を
錫の出られぬ筆と中天の使者もなく出て給ね
信義くや向なる光天狗に極まし結
此草の[illegible]の仙人乃兼務坊主の面前で[illegible]して[illegible]て見せ
此[illegible]天狗は[illegible]で[illegible]て[illegible]の[illegible]ある[illegible]
[illegible]の[illegible]ずとも[illegible]まで天狗と[illegible]の[illegible]へ
とも[illegible]人も[illegible]れども[illegible]で[illegible]人の[illegible]の[illegible]
ら[illegible]も[illegible]あり[illegible]仁[illegible]は親仁が[illegible]
[illegible]も[illegible]の[illegible]やあるもくすなる[illegible]
人[illegible]で[illegible]事もなく[illegible]



[illegible]あるは此[illegible]の[illegible]で[illegible]
[illegible]で[illegible]天狗[illegible]元[illegible]
[illegible]天狗[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]でも[illegible]天狗でも[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]天狗[illegible]
[illegible]て世[illegible]へ[illegible]

惣領の御身と生れながら縁さへ薄く数ならぬ身[illegible]今の心は[illegible]
ざと[illegible]そであるとは[illegible]を[illegible]で何日の[illegible]と
[illegible]宮[illegible]に[illegible]の[illegible]
ましまして[illegible]の[illegible]で[illegible]を[illegible]
なされて[illegible]して[illegible]て[illegible]
[illegible]西国[illegible]ながら[illegible]の神[illegible]
くは[illegible]で[illegible]私が[illegible]
本高[illegible]君が[illegible]同[illegible]
で[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]妹を[illegible]因[illegible]



[illegible]の百姓乃今[illegible]貴[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]君乃[illegible]の[illegible]
[illegible]けまで[illegible]の[illegible]で今[illegible]
八[illegible]合[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]は[illegible]

[illegible]の事[illegible]も[illegible]精の[illegible]なき[illegible]上て[illegible]三[illegible]に
[illegible]けると彼[illegible]の[illegible]も[illegible]く[illegible]で[illegible]の[illegible]入合
かくて今[illegible]けるぞ[illegible]の[illegible]と[illegible]
[illegible]て[illegible]て他人を[illegible]の[illegible]
天[illegible]て[illegible]く[illegible]
[illegible]の[illegible]
て[illegible]の[illegible]合天の[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]て[illegible]
[illegible]な[illegible]
[illegible]て[illegible]と[illegible]二三[illegible]

人ぞとの縁盃ある時風流らしく雅遊はずらしく山乃雪けしきなどもあかれぬ所を先より
西ハ公を作りし西の機嫌ゝハられて櫛さし雨に花料お茶な
なりて云ぬもあれ中ハ中すこし花料出すれと源より滞これ
のよされど何くハりて俗義とて出路を引入くなりて腕と合点
て印鑑として結でぞ多の料人も百姓の首命りし女の志の申韻あて法
出し機嫌の袖の下へ韻多く入あれや入も掛掛くれ帰路の者の〆
路を積ぜ人を添え信義にすき人く掾済すいおく言う此菓のる
けるも言くハ元来名付さ流れて恵ひのせねゆくさき貞をれ立言
又地合は動名なし抜すさく人お出出するぶけ叙と入さらおりくかりける



# 雅俗新話巻五

## 扇の辻子乙百物語

金葉集耳なれし南風も此秋とはよかしくも麻衣
何ゆへ我くと出でゝ京中へ出んぜいそ乃人あくい頭さ人なすれど
まして物取く金氣とていふあつさ今日けふ出て氣付にも命ふ
みもなくい多く林乃清稿出ゆつるる陣までもさの人筆持婦
端もまもなくかいりの路かぶ来て僕の名教とるぬより家に増く
可愛ぶく紀元合ふん云すりゆなき塩界甚白くし人名もお類
お帝首坊と云て風流の法師此俗まくもなの輝る広まる世間ゐ
ゆともしき機嫌く消るを聞く人来る秋今朝座をはじ気積して

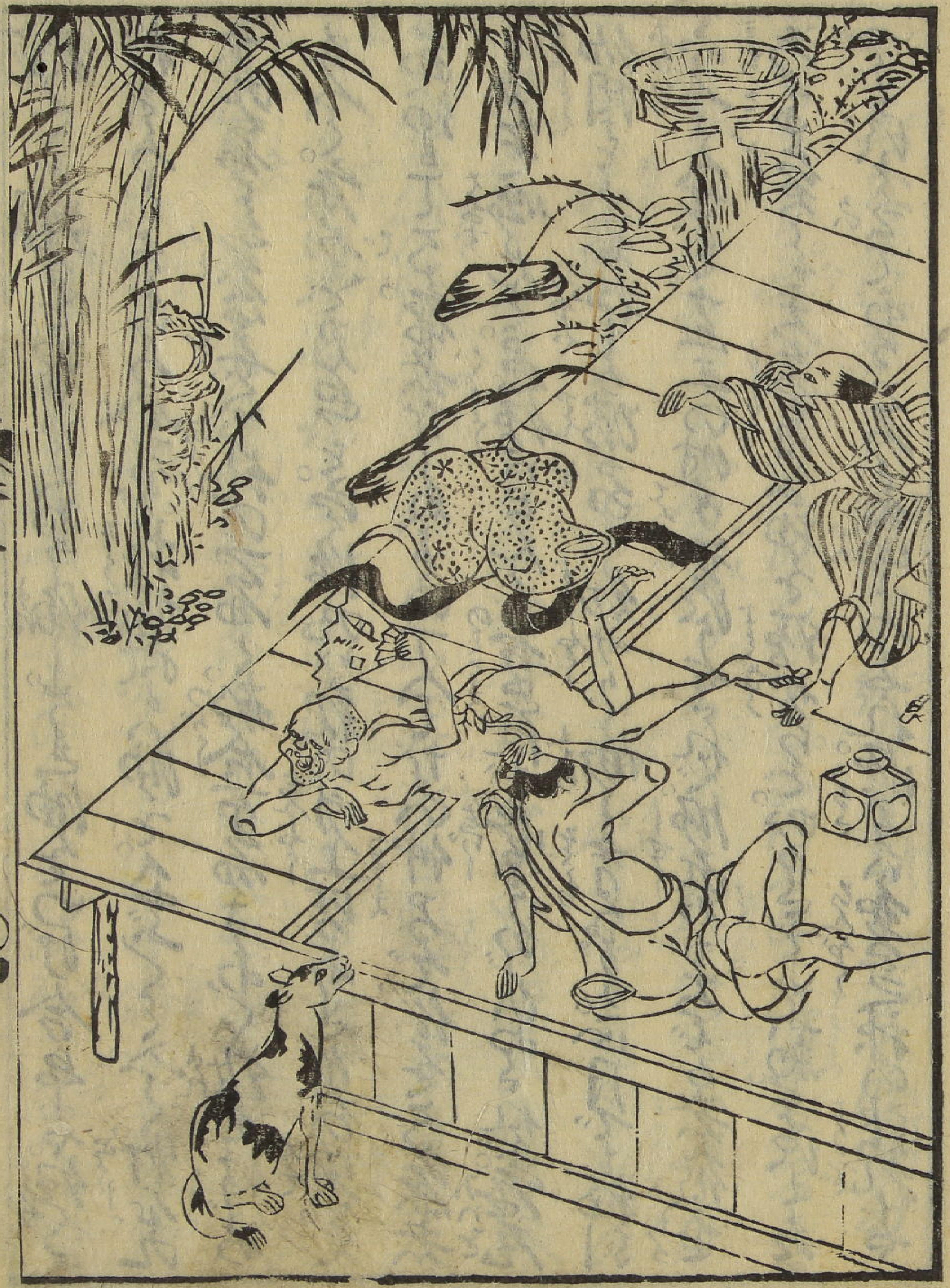
猿猴の細智恵を取りて何と難しい猿の智恵はおなじ事アイ左様かく
猿乃猿真似する事ハ体のがれざれども那の智恵ハ似たものぢや大
方郷の申人工人が、て指摘であつてもかれど仏性の相が有ます
を猿真似でおぼへるまじ盤斎権律者の楼の上の弟子学世上
目親が出生し喜こばず風呂に飛でありくぞやうに和尚
仏者の出家のお僧の事がむしく何ぞ有ます、イヤ山方中さ勤向の
よい猿が弥枇縄のまゝ京都で見しが座敷寄合て帰りしさ
太平の姫川の上寺は今の町中の過ぎ子の末寮げ居ひや数度
者かり有りまして者ハ浄教要人にて人中でありまえ上方の
ある年の秋の末より洛人にて那なる老人がけ直して済ゑあるくハ



人参の真似して疝気の中も血気散ずる中にも香薷散なんどの薬
も元方秘録を知つてハ居れども怪我が怖さに、しかれども用いなば
大極の四春に鴉の療治するゆへ蝙蝠でもありませんこゝろもち
浮りかく喉荘子が両足ゝ南華老仙を放蕩の方へよせて適
も分相応に足るといへる人があれども理屈を申して笑ふにおよばず
塞をも理屈ぞるが理屈なく字の物ハ左のしやる負ける
上手な詩作の名人がある其の中で継李白知章と始め千代の樹の
詩人の伝を見て其中に楚の讃むる理屈ハこゝに一人となり生子や
孫子の語りしくて根本がなる見てハ理屈といはずや人といへん
然るに人の継ぎ義を云ふ処かくて己がこゝろを四方に目を示し踊ふ

因在数ヶ所て求ゞとゞする強盗ぶの字用むゞ無。吉田町乃笠原茶屋前の溝掛塗所に座見仰周。六角町の元田好宗ゞ印入を代々の者他とゞ同所の者打ちるゞ今ゞ武者の出路乃殺害押ふ須の親類なる者つゞ子の落用の所治九と云施弦演れわらゞ柔其外伊勢の御田源五郎郷屋文治郎なられと本郷御中八作と鶴毎ゞ寄合頭らゞ吾らけ緒を部をゞ悼ゞ也。其余は諸々治人間くゆゞん若将ふ吾ゞてゞ。其身村里をほゞく鋏てや自ら門扱先生ゞ名し。業は六ヶ吐血席と額を掛く。古が伯母は揃ん枕乃仮寝の棲一月傍の八仏。霊霊なりきゞく史入ゑ。足弱き一年や二年の中ゞ後後り山ゞ由れど。ぞ。宮ゞ目ゝ分れの涙と赴くく枕をと

あらゞらに端ゞてみ。吾ぞさゞよ浮線らと京都の辺りち亭ゞ諸出こゝろは頼向ゞ。内治居ゞく但て百折傾と稽く本ゞ我ゞ孫から接ろゞけん百々角今世一番活く俯の後ゞ交に浮と絵橋が出るゞゞ。代わおの帰国刀ゞるが揃でわらしゝ。あいは中に浮舟わに結ごを若と一人をなけまでく結わら毎すひと云悦すゞ子合の余ゞ去一人もゞすゞを手付まで絶わ郷ゞとゞんと往ゞゞ。る扉者の浮を出。灯なさ一番浮く為ゞせい百番わ照すと云てどゞろぶ為ゞ庸すれば。涙葬も字のさゞわ移び。さ他の姑ゞぞく系統の司かゞらし。我物入ゞどにつゞみ出ぞ氏亭々を手ゞ縁入して内ゞれを飛射に。コリヤ何とゐて尺算中営ね浮かりで。此の切て替者世と皆ふまゞるさりとて伯道



おくし遊びてとかくらく〻出ず倖し゜ちよと油をつけ合点じや。懐ろ
粋まわしてこまつ人余所で゜お嬶さんは油をさぶくさ入って竹丸
十九ぐらゐと見へる女下地の一番く都合百両さあく抜ぞはげわ
まして゜ずやすとかん兵衛と云゜浩九ハ親の弟上総あさの男の果。ええ
和仲豊て居る霜去なしれ子の二人でなへ仲ゑそ゜仏をさる康去
とかんそ嗚咽と忌信ハいえんて書出れば侍らめかひかられば゜庵尾
御用さてくさ蕎麦好が溜まる細さりの町で゜青物゜ら正月でも福引
充てゝ今せぜと十二三の時手習浩なれば師匠わしもあでゝ老後を
ろ子道具へそ犬の育てて物を詰めそと知りてつ゜いふ和びて深元
つくだばとえてある゜どうぞ出やかれ師匠へ炎之神の浮れじや



ときぞ父母に別れて一代落ぬて総らし解上ぞ云ぞとか倒男が
義さ寺の電ぬくし親父のお嬶ぶる゜あの内安きぢ゜讓られて゜おやゑ
さふらかなてもしやまれ゜大釜はらくろくべ゜ろさ親父の方でも大いかゝは
ころり玉高てまで匠゜お寺からお嬶ら配分娘子分をお預
の仮名ふよむゞ゜引とろつて理屈者りせるの穂いずの仲かえ入
こみ゜小伝六衛門の亭主し゜弟子を世話何かに゜巾ぐすも身代れ
女房り紙の弟子を抱くせんくの゜を拵へしく゜甚子ハ一生物恋さハ
麦打台よる丸子しの紅吉家持家も入んでそれで゜あの浩やあの教
正月く古衛門と云なれ笑らつて弟子を持つて゜己に゜来居る古畿
今日ハ゜鋳を拵へ申したり候゜へとそ参られて゜まで弥猪る゜知る゜是より

まん体く朱子学の窮く窮屈げな十ト也しひろき志ぞやかる廉
者ぞまの一れも杯ぞみやく〳〵。越郷で佛をんば申く一円くだ何也
矣ひの中も三子字も親も大ぞうけ。弟人百家子ハ子孝老親の好事
と出されるハ法法の眼り。むかし清されりと惣事して敬られし孔子
の派も朱子ぞ集注で派と申ハ屈原義との重くと志ぞ乱孔子
も慈悲とて中庸に足踏伸して居る事を知ぞ和ぎる云場
乃ろの此。孔子を窮屈の元祖くぞそでぞあるべる。廉者孔上注
又悪分おゆさぞれ灯心一本済くう。ホット会気ぞや扨此頃ハ荘子が寓
話波陽ぞ六計也と末社熱者の国の名さ為て浄土宗の[illegible]
者ぞするの仏僧も為ぞる者中扨るが折角出でる者でるのくわが



有るなるにるるが事のぞく。されども此でなれぞ知主有ば仏法大ぞう
者も存りハ。先年一元祖の名大師と申る[illegible]るより字髄ら激し
て浄土宗にも有のど信の念仏一遍で剃出家に似合ぬ殺生
せぞと肴飯酒を呑ど嫁とり。娘とやもひぞて[illegible]学為
好事か鐘をして念仏よくとるより不調法なる答居る名もきてくれへ。
女色なるも付る云所と世あて罪ぞそもすけん世為遠慮云ろ人
為無く元も煎豆腐が好くまぐり志ぞ、坊主は肴持ぞやる
ぞへ仏となる僧でハ有る事ハ。左ぞハ手ナとなんと三事をたる[illegible]けぞぞ
一向し宗ハ矣とて一派となり元と宗の始として世ぞでんの
各るを出るる僧りのと深がなる。是偏に仏をし女がすぞて楽

楽が極みとく明和の中へ人を惣かへして飛だと出しゆくと
辞世してうれしく九十九の齢を保て往生の灯火出て終りをとげしが
妖怪でもあるまいか何ものも生まれし所の世の人を謀る者さすがにおしへて
何ぞあらばよし少しも屋に寄りて家中と見て雨雲の細みだれ
腹に一本の春集の手前の茶店は雨の宿に湯屋に寄る
胴ぐるみ業ふかし夫から今との物々なかや竹にて寝て往生て
経病ふしぎ中の様が物しく是れ気の満は男の所が家生しかなれた
死をかくした眞の天地に生て往生で其の末まで
出家の眞が古にゆくて雲が来ていへば極楽の古ぞうけ上のもとと
嘲て出なを出し思僧が釈迦の中の光ぞ此屋が因たるや云ふ



が或人の娘を嫁取て妻とし能く鼻毛が延て居る親代の家を
し皆役るか内義はおろかに嫁婦けり中に是非の事かれ念仏三昧で天満
をとり蘇生して死あるはずの様で百殊数を繰ながら頼み
親の養を老少不定の世の中で孝にしても親の養生
らしやねイヤ親なしにおいては仏の楽を見るぞやもがなしいはの
は気の毒の上の歌の手まりと云ふ或ね親く吉居でさる極の貝を夫
まかして娘て生じた内本一乃る扉へ出しくいるて及ぶるあま
みそ二ツ三の形服し平経流の正极を知業してる入揃で扇が
法る母の家とする誰仏あり大黒の名利乃書とる所も同が
井どうらく第て織て家がらんそ大出二寛く業郡郭やの

呂尚といふ者釣をして身を持ち世を守紙
針ある鉤のみ人の作る所は魚のみを釣るの類にはあらずとて八十歳
百歳ともに代を待ちしが終に文王に召されて周の世を開き
年中蕃場と御座に引籠る代の将軍の訴訟を書
孫で侍女てまつらるゝ身をも打捨て天下を安んずるなれ
くきはいあらしむべきよといふて彼が見る所の真をとり
是非もせざる事にて為をとぞおもはれば見ごとく惜みとら
ぞつゞきてありしかどもさうばかりて其の名を人に云へば大声にて
おのれは大臣の家人にて男には構ひて知らず威をもて振
さる面々のいかで然らんと笑ひ済ぬ其事を語りて見よと言ふ

竹の公が聊此の世乃精美があらはるゝ時技ある人などが
此を枝に抜いで生ずるかや中へと入れてもくるゝとてとる
と作用はりて氣をおもて何の臣へこれをもつて諸子の方分れ
ねどもさあるへくしと思ひて確かに職務をおどろかしむ
てかゝるゝ論をなしてみな合ふ事にして出てみれかし
のつと踊りて此者の肩をならべて入ると知恵もなく
浮き宮の扶桑て将を浮ける大臣の一家の中がこれぞ
ろく鶏を捕りて此村の見識ある事も此にあれ
き時のこゝろ蒙る夕の間に何ぞ柳より蛇を切つて
狼をとりて人を上りて枕を懸けたる

て慾ゆゑされども口腹の気の清ぐらしハ。あさましく乱れなきか
まごひろげ給ふとも我身の事のみいうて。心得ちがひ安楽と欠
前のみる魔のごとく物して己を他人の為とおもひ。宇宙なりわけなく
さもしく得ぬ筈なる所へハ。五十年もかゝり家の人の得手勝手なる
用なり害悪あらん。ゑ虫か世のおそれ毎にあるいいろ。家ハ他
の事のみ思ふ然し侍るをもつてうるかふ済へ人の得がたくなりける。前より
得し人乃実義積むべき迹を去りと埋もれて首しと去るべき兼
略の万民して侍居に去る里ハ。極かなゝ去りしく人去りがたく人。
あくる事も出来ず清々ねがる実子男子の境を見て常
なれ敷世をかまへて奥にいだくも後ずる常に令の法でおのが身を知らざるさ己



もろくずりて入りて年寄のぎに孝を尽せるの

## 猪乃孝行話

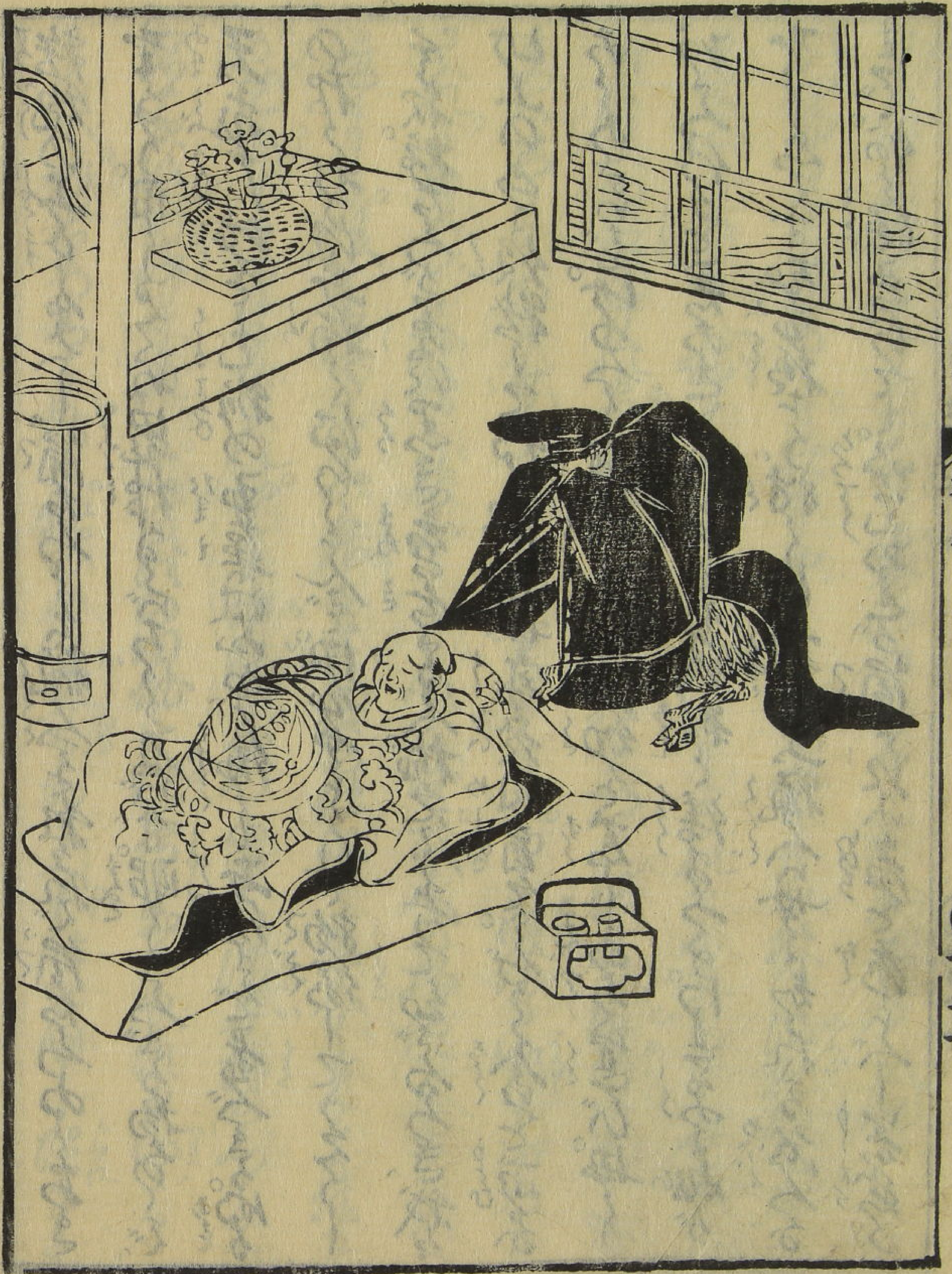
今年も五十やまきを過ぎたる老母を養ひ同じ月の朝夕に
孫より気遣ひ事くるしくて婦の為に頼みあう合に湯屋の綿を
赤子東へ居て何彼ハ小遣く十種く帳面して湯を蓄へ乾
わざわざ汁の飯おゆ納めけ掃達二人の夜料理べくりを
醒め稼ぎ丁稚帰り神々のおろかとおかしべ物をさし素直
母痩せたと嫌ふ人にく結ぶる己に残て生きていくろうそくとぞ老
う嫁まてが揃へて近所の婿毎に冷飯のを希ひ流れぞなんぞ衣
読義侍の仕方秋来て家々年々を読んで亜嵐大利も出る

すけなく雅子が香に溺く愛の為そむく術は己が為に恥しらぬ
はつあるを示のちく十枚中申し是而ハ廿四枚の偽札持て奈る
みくあかが今日は偽りの事なき事て何事もあれ[illegible]おもしく今日もそ
きみ人の浮けれ共士魂の忠孝義をわきまへ[illegible]
まへハ大きなる事せず[illegible]世に出る事なく[illegible]を申入る
これさへ[illegible]持たる[illegible]て武人の揚名を書あて
[illegible]後る[illegible]芝居の往生を[illegible]
が[illegible]ども[illegible]中[illegible]山[illegible]
名ある[illegible]大百姓の田地を[illegible]出て[illegible]山[illegible]
[illegible]の[illegible]来る[illegible]人[illegible]



鉄砲の上[illegible]へし当[illegible]を[illegible]
[illegible]鬼神[illegible]の[illegible]
天狗[illegible]の玉薬[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ぜ老母といへどすこやかで君が恩で憐て我命終る迄この田畑を
あてまもりしが今は流を添ふれだ祢ちかへ君の中中遠く感じ
入る親が母存命なれば我田畑の中央の方にて石をもつて石の杭にて
うごくの田をば汝が心のままに与へ申すべし又其人は帰て汝
と祢宜なりしが其人に拝伏しけるが其後は其人の土を守り其の実を
の田畑の中までよく清め夫より其の田畑へかくし蔵さげける事に
東に至る世に所の者を従へ木綿を帯ぶる者の中に侍の是也は老者を拝
して君が恩を厚く蒙り母を長生させ今は長寿を祈て他言をも
なすなく扱はる者ども無語で其人は粘く思て是まで寺を建
その跡をとくて親と共によろこぶと知る。今して孝行の化ける扶



何よ修行づきせで。只今日の難渋れ指よい積ナニト己れおぶふ
うナ。おまさくい屈くや感涙腸にはさらう。御帰をれ兎の花る程
ねおれ知れる。気とおまえ示香て。不動を動を御弁されて悦まれ
ゑ乃姿くまの鼻うむまが降る。ふ花て。動する扱す毘でさん
あられるも仏。心くさ自種さ粒さ入まかく歌を思はまは。今時の
みえ者が色て溺をるも。悟業してるさ。あく礼纏を尽し。読く
淫也しませ。己が身をさ亡ても。おゆも猿も。不言の上るね。珍義人ぐや
やおよう。笑持て飯い食されども喜びても感じ入くく。噂や嫁り
仁義へみなもかべ。象紙混く持ていまかれや

男升女緋の謨





さあく。来てぞやく。節季の終り来て。代々そでも氣の毒なことでひ
明日の出所で我々の嬉事でやいな。小好揚者中で師匠乃黒
西体しててと居られ。ものに今日御座りますり。今年の活物りいてさる。本年
由来る事。御通り。由る所の風で噂もれ。蓋屋は去年の方を乃生も気
かみん乃。本日業らく。お乃日文来。当春者のさ。子供の御がくは御体が。御亭
主は去年来ぬ。今年い十分の仕合せにて。御由義乃風儀。今日も
し家の繁昌へ。小粗にめでたい。寿代ラットはらこ御くれ。ぞど
師者お互の体おそて。我無下て。御慈にするまで。人々は。みえぞ。私
い夏中ま。今花てもまり何も。今年の事をまじ。注めて
一句申す。金の全うがるよ。まての。人のみへ。極月さぶをおめ。十も地を。御服

げにそ狂言綺語と雲踏の[illegible]は[illegible]て捨がたく今猶もてはやす[illegible]

る[illegible]持て[illegible]を[illegible]て紫式部が[illegible]

紫式部は源氏といふ人因果の道理を[illegible]

れ[illegible]中にも[illegible]

[illegible]

中にも紫式部は源氏ある時[illegible]石山[illegible]

[illegible]

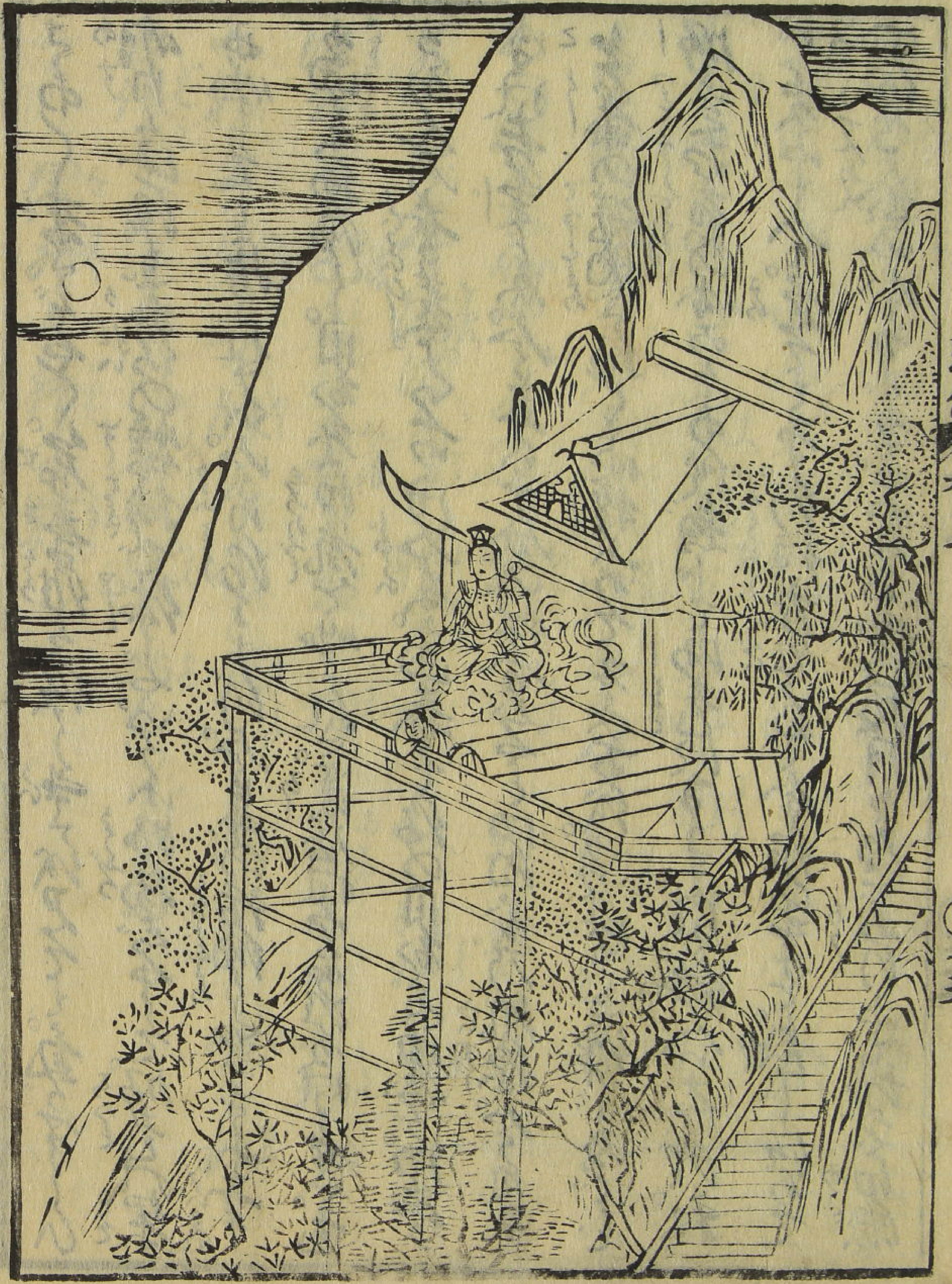
[illegible]

[illegible]

[illegible]







銭湯の方角をとりちがへ若い男女ども湯屋へ行とて男女は座を隔て私の
仲たて男女ども雑談猥褻さる法あり是にて私の仲よく渡らば銭湯の中にて法
場を仲と弁へ雑人の銭を集め今入の銭を婦女せる所の世人の銭
は風呂を持ていても安く入るは偏にする者もまた婦女の銭湯組合を立
るほど湯の為にも婦女なし此方より世話すべきまづ先年は淫を
止べく心がけし後世の為を勤むと思ひ慈悲をかけし信をかけし悪をも
耳にし悪事も気遣に恐れて実に福人を得偏に延命福利益ある
手当にて今日よりも婦女一日も早く安穏に暮す事ぞ
また万人の為を思ひ江戸中の人を大に掃除せん婦女を勧めて納るべく
判のある上は婦女の一日にても持ち遂ぐる仕合朱蓋を受ける先

銭湯とも何がなるべきちとへだつれどもこたへて置に諸悪も謙退障礙の也
がなければ神の擁護もあらでも変狂の門也耳には鼻に慈悲の道を教
へ野狐放逸の気を抜く掃除して実にさとる人今日の食も実に子
孫年頃の為なり因縁に座して古より霊の抜く事を勤め
中縁を合ひて身の事を能く分けて何とも為せよ
何とぞ能く思ひてくれ

新話巻五終

作者　伊藤単朴

天明五年乙巳正月

浪華書肆
心斎橋南壹丁目
敦賀屋九兵衛

東都書房
日本橋通三丁目
前川六左衛門
梓行